

アーツ前橋
地域アートプロジェクト
2011-2015
ドキュメント

照屋勇賢

ペ・ヨンファン

片山真理

ヘヴン・ベク

藤浩志

白川昌生

EARTHSCAPE

伊藤存

幸田千依

高橋匡太

フェルナンド・ガルシア・ドリー

増田拓史

南風食堂

風景と食設計室ホー

西尾美也 +FORM ON WORDS



Contents

02	館長挨拶
04	1 滞在制作
06	照屋 勇賢
10	ペ・ヨンファン
14	片山 真理
18	ヘヴン・ベク
22	Column 照屋 勇賢 「アーツ前橋シンポジウム～地域とアートを紡ぐ3日間～」 におけるプレゼンテーションから抜粋
23	Contribution 片山 真理 「25日間の滞在制作について」
24	2 街を舞台にする
26	「モヤモヤ」からアーツ桑町へ
30	駅家の木馬祭り 白川 昌生
34	メディカル・ハーブマン・カフェ・プロジェクトin前橋(MHCP) EARTHSCAPE
38	磯部湯活用プロジェクト 伊藤 存・幸田 千依
44	あかりプロジェクト-街にひろがる光- 高橋 匡太
48	Column 伊藤 存 「アーツ前橋シンポジウム～地域とアートを紡ぐ3日間～」 におけるプレゼンテーションから抜粋
49	Contribution 高橋 匡太 「あかりプロジェクトを終えて」

50	3 食とアート
52	風の食堂 フェルナンド・ガルシア・ドリー
56	前橋食堂 増田 拓史
60	風の食堂 in 粕川 南風食堂・風景と食設計室ホー
68	Column 増田 拓史 「アーツ前橋シンポジウム～地域とアートを紡ぐ3日間～」 におけるプレゼンテーションから抜粋
69	Contribution 風景と食設計室ホー永森 志希乃 「柿の実、最後の3つは、鳥と、神様に」
70	4 衣服と記憶
72	ファッションの時間 西尾 美也+FORM ON WORDS
78	Contribution 毛利 嘉孝 「アーツ前橋のアートプロジェクトを評価する」
82	地域アートプロジェクト 展開図2011-2015
84	地域アートプロジェクト 活動マップ2011-2015
86	美術館が行う地域アートプロジェクト

私たちの多くは、自分が感じていることを伝えることに長けているわけではありません。また、日々の生活に追われて、注意深く繊細に何かを見つめ、耳を傾けることも忘れてしまいます。現代社会において、「アーティスト」と呼ばれるのは、個人の感じたことを色々な方法で形に置き換え、私たちとそれを分かち合うことができる人たちです。

そうした表現活動が美術館の展示室を出て、人々の日常生活や自然と直接的に結びつこうとしている傾向は、近年大きな注目を集めています。美術の領域を成り立たせている「固有」の歴史や技法に依存せず、社会というフィールドに出ていくと、他の芸術ジャンルのみならず、地域社会、経済、福祉や医療、自然環境など、多岐にわたる活動領域と出合うことになります。そこでアーティストたちが、個人の感じ方や考え方をもとに独自の表現を創り出す可能性に魅力を感じる人が増えているように思います。

一方で、こうした活動はどうしても展覧会や普及のための期間限定の事業が多い美術館にとっても、多くの関係者と話し合い、長い時間をかけて個々の事業を実現するため、新しい活動方法を抱き込むことになります。ただ作品を展示するだけでは触れることができない、創造の秘密とも言うべき制作プロセスに関わり、未知の表現と並走する経験から受ける恩恵は計り知れないものがあります。その結果、美術への自らの固定化された思い込みや既成概念に気付かされ、新しい価値観を受け入れる文化的な寛容さを得ることができるからです。

これはアーツ前橋の開館準備の段階、まだ建物を持たない時期から地域にアーティストとともに出ていき、事業を行ってきた4年間の活動をまとめた冊子です。展覧会とは異なる形式で実施される活動については、多くの方が見ることができない代わりに関係者や参加者は強く深い体験をします。あるいは個々の事業がどのような関連を持っていたかという点も含めて、あらためてこうした記録を通して多くの人にお伝えできればと願っています。

最後になりましたが、ご参加いただいたアーティスト、各事業へのご協力やご支援をいただいた皆さんに心から感謝申し上げます。

アーツ前橋館長
住友 文彦
2015年3月



1 滞在制作

Concept

アーティストの活動を支援するために、**作品制作に必要な空間と時間を提供**するのが滞在制作事業である。また、実際に生活するなかで地域と関わるのが作品制作のきっかけになることもあった。

これまで4名のアーティストを招聘したが、それぞれ作品もキャリアも異なり、**作品制作の進め方や地域との関わり方も違う**。しかし、長い時間をともに過ごし生み出されたアイデアは、実現しなかった案も含めて、アーツ前橋の活動に活かされている。出来上がった作品はもちろん、作品として**完成する前のプロセスも地域の人たちの心を動かし、巻き込んで**いった。また、地域のアーティストたちが交流し制作にも協力することで、前橋を超えて、さまざまなプロジェクトに派生していくこともこの事業の大きな魅力である。今後は、地域のアーティストも含めた制作環境を支援していく方法をさらに検討していく。



2014年2月に滞在制作が地域にもたらす影響や、必要な環境整備などについて話し合う「アーツ前橋シンポジウム ～地域とアートを紡ぐ3日間～」を実施した。国内外の約15名の有識者によって様々な角度から滞在制作について議論された。それがきっかけとなり、アーツ前橋でも本格的に滞在制作事業を始めるため、前橋中心市街地に位置する4階建てビルを改装し「**豎町スタジオ**」として2014年より運営を開始した。



■ 豎町スタジオ

前橋市千代田町2丁目4番26号

1 階	スタジオスペース
3 階・4 階	滞在スペース



1F



3F



外観

アーティストの選定

海外からの招聘アーティストの選定は、国外で活動するキュレーターやアーティストの推薦を受け、アーツ前橋で決定している。

推薦者

ポーリン・ヤオ (M+美術館 ビジュアル部門キュレーター／香港)

クォン・ジン (キュレーター／韓国)

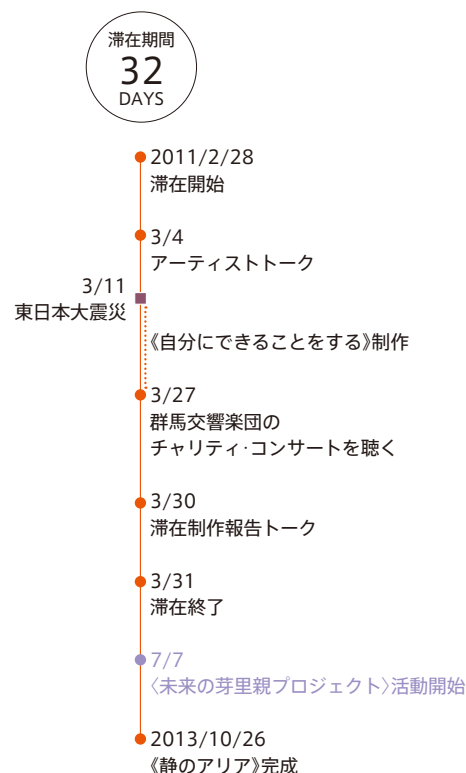
ローワン・ゲディス (ガスワークス レジデンスプログラマー／イギリス)

照屋勇賢 (アーティスト／日本) ※アメリカ在住

1 滞在制作

Artist

照屋 勇賢 TERUYA Yuken



沖縄出身でニューヨークに活動拠点を持つ照屋勇賢は、地域のアーティストや住民と交流するなかで、**ローカルな社会や文化への問題意識**を大切にしながら、どのように国際的なアートシーンで活動しているかを伝えた。また、沖縄の美術館が開館する際に彼が何を考えたかを聞いたことは、アーツ前橋の開館を準備するうえで大きな糧となった。

彼の滞在期間中に発生した東日本大震災は、**芸術は社会の危機に何ができるのか**という問いを投げかけ、こうした照屋との対話を深化させた。その結果、地元紙「上毛新聞」の震災報道の紙面から、周辺の公園等で観察できる植物の芽が立ち上がってくる作品《自分にできることをする》を制作した。この作品をアーツ前

橋のプレイベントで展示した際に、市民の間から**地域の記憶として残すために作品を共同購入して美術館に寄贈**する〈未来の芽里親プロジェクト〉という活動がはじまった。この活動は2014年11月まで継続され、アーツ前橋に寄贈された。

また、基本設計の段階だった美術館の改装計画においても、多くの人が**普段は見ない非常階段がガラス越しに見える小さな休憩のための部屋**をつくる提案が照屋から出された。そこは《静のアリア》と名付けられ、毎日午後2時と4時に群馬交響楽団が震災直後に開催したチャリティコンサートでの震災後の公演活動を伝える挨拶とバッハの「G線上のアリア」の録音が流れる。

アーティストトーク

開催日: 2011年3月4日(金)

場 所: 旧ミニギャラリー千代田

(前橋市千代田町2丁目8番12号)

滞在制作報告トーク

開催日: 2011年3月30日(水)

場 所: 旧ミニギャラリー千代田



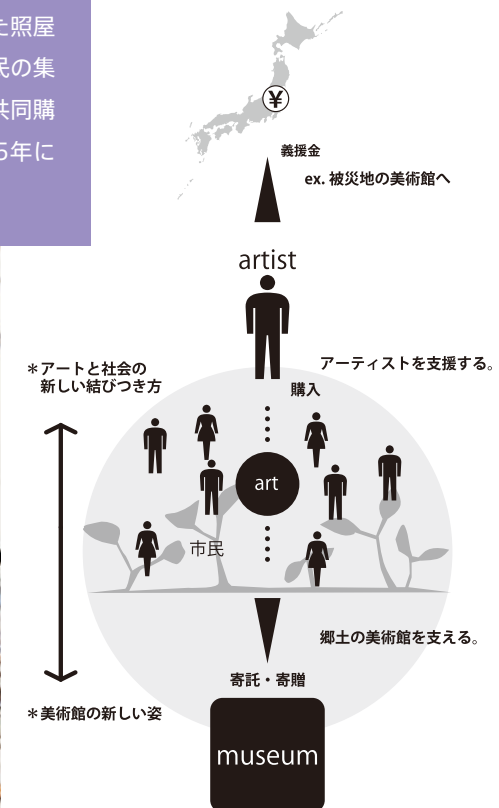
市民による作品共同購入の活動

未来の芽里親プロジェクト

前橋での滞在制作中に、東日本大震災を体験した照屋が制作した作品を、前橋に残したいと考えた市民の集まりにより生まれた活動。誰でも少額で作品の共同購入に参加できる仕組みで、購入した作品は2015年に前橋市に寄贈された。



《自分にできることをする》



【プロジェクトのイメージ】

《静のエリア》

東日本大震災を前橋で体験した照屋は、基本計画の段階だったアーツ前橋にコミッションワークの設置を提案。それは非常階段だった場所を使った作品で、来場者に非常時を意識させ、いつ何が起こるかわからない状況を感じさせる。また、震災の後、非常時の芸術や美術館の役割について学芸員とやりとりして書かれた文章と照屋のドローイングがまとめられた冊子がおかれている。



冊子「静のエリア」のスケッチ(照屋 勇賢)

Profile

照屋 勇賢

TERUYA Yuken

1973年、沖縄県生まれ、ニューヨーク在住。1996年に多摩美術大学絵画科卒業、2001年ニューヨークのスクール・オブ・ヴィジュアルアーツ修士課程修了。世界各地の展覧会に参加し、国内外で評価されている。2002年、オールドリッチ現代美術館にて新人賞受賞。2005年に、「Greater New York 2005」(MoMA PS1、ニューヨーク)、「横浜トリエンナーレ」等で注目を集め、国内外の

美術館に収蔵される。主な展覧会に「アジア・パシフィック・トリエンナーレ」(2006、クィーンズランド・アート・ギャラリー、クィーンズランド)、「Shapes of Space」(2007、グッゲンハイム美術館、ニューヨーク)、「愛についての100の物語」(2009、金沢21世紀美術館、石川)、第4回モスクワ・ビエンナーレ(2011、モスクワ)、第18回シドニー・ビエンナーレ(2012、シドニー)。

1 滞在制作

Artist

ペ・ヨンファン 韓国
BAE Young Whan



滞在期間
25
DAYS

2011/8/14
滞在開始

8/27
一時帰国

10/2
再度前橋へ

10/8
福島で撮影

10/12
滞在終了

11/23
アーティストトーク
作品展示
「イメージのさざ波」

12/16
展示終了

2012年に招聘した韓国人アーティストのペ・ヨンファンは、繊細な感覚によって人々が忘れ去ってしまうもの、見過ごされがちなものへ視線を向けることで作品を制作してきた。彼が少しずつ街を知り、人々と交流するなかで感じ取ったことは、**グローバルな近代化/産業化の波によって地域社会が何を失いつつあるのか**、という点だったように思える。

もの静かで丁寧に地域の人と接するうちに、彼は群馬大学で社会学を学ぶ福西敏宏氏と知り合う。個人的な信頼と交流を育みながら、普段とは違う視点で街を見るために、福西氏と動物にカメラを搭載して撮影するための実験などを行った。また、近代化の過程で新しい言葉の表現を切り拓いた**萩原朔太郎**や、卓越した物理学者で市民に原子力に関する情報を提供する活動を行った**高木仁三郎**にも強い関心を示した。



そして、滞在の終了間際には、津波の被害を受けた福島の沿岸部を福西氏らと共に訪れた。頭の前と後ろに二つのカメラを取り付け歩きながら撮影し、映像作品《福島のため息》を制作した。**テレビニュースやドキュメンタリーの映像とは全く異なる形で被災地の風景を伝える作品**になった。

また、そこで見つけた瓦礫の木片などを貰い受け、ギターとウクレレの形をした作品《オブジェクト／福島のため息1》、《オブジェクト／福島のため息2》も制作している。これは、彼がソウル市の都市開発によって壊された木造家屋の残骸を楽器にした、これまでの作品の延長にあるものだと言えるだろう。なお、群馬大学に留学していたチョ・ムンジュ氏が通訳として果たした役割も大きかった。



《オブジェクト／福島のため息1》
《オブジェクト／福島のため息2》



作品展示「イメージのさざ波」

会 期: 2012年11月23日(金・祝)～12月16日(日)
場 所: 旧ミニギャラリー千代田

アーティストトーク

開催日: 2012年11月23日(金・祝)
場 所: 旧ミニギャラリー千代田

Profile

ペ・ヨンファン

BAE Young Whan

1969年生まれ、ソウル在住。急激に変化し続ける韓国社会において人間の持つ脆弱さや率直さを表現するような作品で国際的な評価を受けているアーティスト。これまで、歌謡曲が呼び起こす共感をもとに集団的な記憶をテーマにした作品や、ホームレスのためのポケットガイドなどの作品を発表している。

近年は、文化に触れる機会が少ない地域にコンテナを使った移動型図書館を持ち込むプロジェクトなどを行う。2010年の「Autonumina」展(PKMギャラリー、ソウル)以降は、人間と伝統文化や社会をめぐる基礎的な問題を作品として取り上げている。



1 滞在制作

Artist

片山 真理 KATAYAMA Mari



「豎町スタジオ」整備後、初の滞在制作事業として、大学時代までを群馬県で過ごした片山真理を招聘した。アーティストとしてだけでなく、歌手、女優として全国で活躍する片山は、大学時代に多くの時間を過ごした前橋での滞在制作だからこそ新しいことに挑戦する機会だと捉え、地域の人と関わりながら作品制作を行った。

2回に分けて滞在制作を行い、1回目の滞在ではワークショップ形式で様々な人と共同して、石膏で足や手を型取り、それに片山が革をパッチワークのように縫い付けていくという制作過程を公開した。それは、自らの身体をテーマにした作品や自身の作りこんだ空間で制作していた片山にとって、他者の存在を自らの制作に介入させる実験的な制作だった。完成した作品《you're mine》は、滞在制作終了後、「トラウマリス」(東京)で展示された。

滞在期間
30
DAYS

- 2014/9/30 滞在開始
- 10/12 公開制作&ワークショップ
- 10/25 成果発表展
- 10/26
- 10/29 滞在終了

滞在期間
26
DAYS

- 2015/2/19 滞在開始
 - 2/21 店舗でセルフポートレート作品の制作
 - 3/14 滞在制作報告トーク
 - 3/16 滞在終了
- 作品展示
「30 DAYS IN
TATSUMACHI
STUDIO」



《30 days in tatsumachi studio》

公開制作&ワークショップ
開催日: 2014年10月12日(日)
場 所: 豎町スタジオ 1階

成果発表展
開催日: 2014年10月25日(土)、26日(日)
場 所: 豎町スタジオ 1階





2回目の滞在では、地域の人との関わりを発展させ、前回の滞在時に知り合った中心市街地の店舗の中でセルフポートレート作品の制作を行った。店舗の雰囲気と店主との会話から、空間に対する物語を作り、撮影を行った。それは、**他者が作りこんだ空間に片山自身が入**

り込み、その風景の一部となるような、内(片山自身)から外(他者)へ介入していく試みだった。

また、滞在制作をしているアーティストについて、アーツ前橋への来館者が知ることができるよう、制作した作品をアーツ前橋のカフェに展示した。

作品展示

「30 DAYS IN TATSUMACHI STUDIO」

1回目の滞在で制作した作品の一部をアーツ前橋内のカフェに展示した。会期中も展示作品を増やしていく、片山真理の活動を知ることができる場所として運営した。

滞在制作報告トーク

開催日: 2015年3月14日(土)

場 所: ROBSON COFFEE アーツ前橋店

料 金: 500円(1ドリンク付)

会 期: 2015年2月21日(土)～3月14日(土)

場 所: ROBSON COFFEE アーツ前橋店

Profile

片山 真理

KATAYAMA Mari

1987年、埼玉県生まれ、群馬県育ち。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修士課程修了。9歳の時に両足を切断。以後、自身で装飾を施した義足を使用し、セルフポートレートを制作。現在、作品制作の他に『ハイヒールプロジェクト』として歌手、モデル、講演、執筆など多岐に渡り活動している。受賞に、2005年「群馬青年ビエ

ンナーレ奨励賞」(群馬県立近代美術館)、2012年「アートアワードトーキョー丸ノ内グランプリ」。展覧会に、2010年「identity, body it. -curated by Takashi Azumaya-」(nca、東京)、2012年「自由について2」(トラウマリス、東京)、2013年「あいちトリエンナーレ2013」(愛知)、2014年個展「you're mine」(トラウマリス、東京)など。

セルフポートレート作品の制作は、前橋中心市街地の飲食店や、小売店など8店舗で撮影された。

協力店舗

あじさい / アツミレコード / Cafe Frida

喫茶りこ / 鈴木ストア / 鈴木めがね店

中華そば ほんこん / 山都園



01



02



03



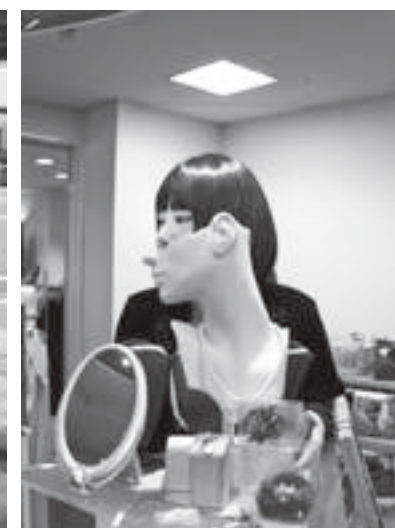
04



05



06



07

01 《25 days in tatsumachi studio / アツミレコード》、02 《25 days in tatsumachi studio / cafe Frida》、03 《25 days in tatsumachi studio / 山都園》、04 《25 days in tatsumachi studio / 鈴木ストア》、05 《25 days in tatsumachi studio / 喫茶りこ》、06 《25 days in tatsumachi studio / 中華そばほんこん》、07 《25 days in tatsumachi studio / 鈴木ストア》

1 滞在制作

Artist

ヘヴン・ベク

韓国
Heaven BAEK



ヘヴン・ベクはソウルを拠点に海外での活動も多く、地域のコミュニティに客人として触れ合い、人々の記憶をもとにした作品を制作することが多いアーティストである。前橋でも地域のひとと軽やかにコミュニケーションをとり、インタビューやワークショップを通して市民を巻き込みながらプロジェクト「LAKE SCRATCHERS」を行った。

かつてそこにあったものがなくなり、地域の風景が変わっていきなで、なくなってしまったものに対する

る記憶をもう一度考えなおしてみるワークショップを行った。ヘヴン・ベクは、地域の変化に対する人々の記憶やそれに対する感情が風化していくことを、何かにコントロールされている状況であると捉え、その状況を赤城山の大沼の上でゆらゆらと進むボートに乗っている状況になぞらえた。最後にはワークショップに参加した人々と、自由に湖面上を移動できる冬の凍った大沼に行き、記憶を刻むパフォーマンスを行い、映像作品を制作した。



ワークショップ

ワークショップは、各参加者の認識や記憶を通して、“前橋のかたち”を紙の上になぞることから始まった。前橋の現在の輪郭を正確になぞる人もいれば、合併前の前橋の形をなぞる人、自身の普段の行動範囲をなぞる人などもあり、それぞれ多様な認識と理解を持っていることがわかった。その後、ヘヴン・ベクの用意した様々な種類の道具や素材(スリッパや画鋏などの日用品や、竹竿、釘、針金など)を用い、それらを組み合わせ、記憶を刻むための道具「Scratchers」を作った。

開催日: 第1回 2014年12月 9日(火)

第2回 2014年12月16日(火)

場 所: 豎町スタジオ 1階

アーティストトーク

開催日: 2014年12月19日(金)

場 所: 豎町スタジオ 1階



成果発表展

「Scratchers」をはじめ、インタビュー、ワークショップを通して人々と制作した作品が、制作の拠点となった豎町スタジオやワークショップに参加した市民の店や自宅に展示された。豎町スタジオでは、前橋市の合併の記憶について市民にインタビューした際の録音声が流された。展示会場は広範囲にわたり、会場を巡るためのマップが制作され、配布された。



豎町スタジオ会場

会 期: 2014年12月20日(土)～25日(木)

その他の会場(11箇所)

会 期: 2014年12月20日(土)～赤城山の大沼が凍るまで



Final Performance

赤城山の大沼が凍った時期に、ワークショップに参加した市民とともにそれぞれが作った「Scratchers」を持って、記憶を刻むためのパフォーマンスを行った。

まず参加者と共に、日本のお神輿を模して、「湖が凍った!」の掛け声とともに湯船型の「ボート」を担ぎ、街なかの様々な場所に展示された「Scratchers」を回収していった。その後、大沼へ移動し、湖面を「Scratchers」でひっかくパフォーマンスを行う予定だったが、荒天だったため、湖面の前でのパフォーマンスを行った。最終的にはパフォーマンスの様子を映像作品として制作した。



Profile

ヘヴン・ベク

Heaven BAEK

韓国、釜山生まれ。オーストラリアのロイヤルメルボルン工科大学でメディアアートを学んだのち、渡英。スコットランドのグラスゴー美術大学にて美術修士号を取得した。ヘヴン・ベクの作品は、社会の中で人々がどのように行動し集うのか、個々の状況に適した多様で独特な方法を通して、いかに自分たち自身で多彩な「社会」を組織するかといった問題に取り組んでいる。ビデオを主要なメディアとし、写真やインスタレーションも手がけつつ、様々なテーマや事柄への関心を実践的に探求し表現している。2013年には、韓国のアルコ美術館の「ヤング・アート・フロンティア」プログラムアーティストに選出され、ソウルのインサ・アートスペースで個

展「Our Lady Vengeance」を開催。また、ソウルのシンドー・アートスペースによる「アーティスト支援プログラム(SINAP)」の助成を受け、個展「we; within us」を開催した。

近年のグループ展に、「Gunsan Report」(アートスペース・プール、ソウル、2012年)、「a cabinet of exhibitions」(アルコ美術館、ソウル、2014年)、「Caesura」(リード・ギャラリー、グラスゴー、2014年)など。作品は、ソウル、パリ、グラスゴー、レイキャヴィク、バルセロナなど、世界各地で広く展示されている。2015年現在、韓国、コヤンの国立近現代美術館にて滞在制作を行っている。

照屋 勇賢

「アーツ前橋シンポジウム 〜地域とアートを紡ぐ3日間〜」におけるプレゼンテーションから抜粋

《静の Aria》は滞在中に起きた東日本大震災をきっかけに作っています。それもやはり震災と関係があるんですけど、「朝日ぐんま」の中島さんの付き添いで群馬交響楽団の演奏を聴くチャンスを受けました。これは3月27日だったので地震から約2週間後ですね。その夜の演奏会は、その後の僕の美術館、音楽ホールの考え方を大きく変えるきっかけを与えました。その時の僕が体験した経験を皆さんに共有してほしいと言う気持ちがこの作品に発展しています。あの地下1階のギャラリーゼロがリノベーションされる前は非常階段でコンクリートむき出しの空間でした。その中で何ができるかいろいろ考えました。

この作品のガラスの向こうの非常時側から聞こえる音は、震災直後の出来事になってしまうので、過去から繋がる記憶というものになる。でも、そこにある本は未来に何かが起こるかもしれない時に美術館や芸術にどういうことができるのか、そういう用意ができていると伝えるものとして、公共施設としての立ち位置を僕は感じています。そうした役割が美術館にはあると思います。

僕はその本を作ったことと、常にあの空間があるという2つが実現し、こうした試みをさせていただいたことに非常に感謝しています。それはあの記憶をどのようにして未来に伝えていくかという点だけでなく、例えば音楽ホールで経験した事がある意味美術館がもう一回それを価値あるものに、そういった生まれたばかりの価値を共に育てる場所としての役割を一步踏み込んだなと思っています。あの緊急事態の状況を意識するのが大きな課題だと思っています。消防隊などが実際に人命救助を行うのとは別の、精神的な支援が芸術には求められるという気がします。

また単純に僕自身、今の感覚が10年後変わるかもしれない。どのように作品の見え方が変わって、どのように自分の説明の仕方が変わっていくのかということの確認するうえでも重要なことなのかと思っています。最後にこれを作ったことが、どのような形で僕の作品に反映するのか分からないです。けれども、もう一步踏み出した試みがその先にあるんじゃないかなと思っています。

片山 真理

25日間の滞在制作について

2回目の滞在では中心市街地にある8件のお店にご協力頂き、店内でセルフポートレートを撮影しました。これまでの私の作風は、自身の作品などで部屋を作り込み、その中でセルフポートレートを撮影するといったもので、自分以外の人をその空間へ入れることは一度もなく、外に出て撮影しようと思ったこともありませんでした。理由は2点あり、自分の身体的特徴(義足を脱いしまうと外に出られなくなる)と、いわゆる「アートの現場」以外で「アーティスト」として人と関わる勇気が無かったことにありました。私のアートデビューは2005年の群馬青年ビエンナーレ05'(群馬県立近代美術館)への出品でしたが、それ以降もアートはよく分からないし、自分がアーティストであることになかなか自信が持てず、アーティストとして人と関わることを意識的に避けていたのです。

そんなビビりで根性の無い私が、外に出て街の人と交流し、制作するなんて1ミリも想像できません。しかし2回の滞在制作を経て、私は前橋の街と人に魅せられ、引き寄せられ、作品を残しました。

ことの発端は1回目の滞在中で、深夜に腹を空かせ街を徘徊していたところ、アーツ前橋の近くにお好み焼き屋さんを見つけました。入ってみると、80年代の映画に出てくるいわゆる「ダイナー」のような店内に、奥にはお酒がキラキラと並び、お好み焼き用の鉄板が設置されたバーカウン

ターが。

こんなお好み焼き屋さん見たことない！と、私は興奮してしまい、お店のママに色々な話を聞かせて頂きました。その時「今のお住まいは前橋なんですか？」と質問され、私は初めて「アーティストとして前橋で滞在制作をしているんです」と、自分のことを紹介することができました。

そうやって日々、ふらふらと歩きながら街の人たちと交流していくにつれ、私の作品と何か共通の感覚を得るようになりました。前述の通り、私はセルフポートレートの撮影において、自分の作品で構成した世界を作りあげます。前橋という長い歴史のある街、何よりもオーナーがお店という作品を作り上げていくことと、私の作品を作る手法が重なりました。そして自然な流れで今回のセルフポートレート撮影に至りました。

撮影では、お店に配置された棚や照明、装飾物、ポスターなど、それぞれの世界感、ルール、空気をそのままに、私なりにストーリーを編み、決して異物としてそこに登場するのではなく、空間に入り込むことを念頭に置きました。

滞在制作報告トークでは、ご協力頂いたお店のオーナー様方がご来場くださり、最後に「ありがとう」と握手をしてくださいました。その手は365日休まず営業している根性そのものを表すような手で、触れた瞬間、前橋で制作ができて本当に良かったと心から感動しました。

2 街を舞台にする

Concept

昭和の佇まいを色濃く残す前橋中心市街地は、北に広瀬川、南に馬場川が流れ、9つの商店街が存在する。商店街には飲食店や金具店、呉服屋など多様な店舗が存在するが、空き店舗や空き地などが目立つ。そのような街の隙間を活用する方法をアーティストと考えたり、アーティストが手を加えることで、新たな魅力を創出し活用方法の提案をするようなプロジェクトを実施してきた。それらはアーティストと地域の人が協働で実施した事業もあれば、アーティストのアイデアに触発され、市民団体が自ら実施した事業もある。

すでに価値を与えられたものに眼を向けるのではなく、アーティストは自分たちで価値をつくりだす。それは個人の感性を出発点に自分の手で何かを作り出し、人と共有することができる者にしかできないことである。

ここ数年で、若者を中心とした商店街の空き店舗の活用が目立ち始め、アーティストが運営するギャラリーや共同アトリエ、デザイナーや建築家などのシェアオフィス、学生のシェアハウスなど、クリエイティブな市民が立ち上げた活動によって、これまでになかったようなスペースが増えてきた。



2 街を舞台にする

Project

「モヤモヤ」からアーツ桑町へ



開館前の2011年7月にはじまったアートスクールBコース「モヤモヤをかたちにする」では、アーティストの藤浩志を講師に招いて、参加者が街歩きをしながらいつもの風景を眺めて感じることや、自分たちが街のなかでやってみたいと考えていることを意見交換した。そのなかから、すぐにできることを選んで実際にみんなでやってみることで、**普段は個人で考えていることを他人と共有し、気軽に行動を起こして**みることを後押しするプログラムだった。その後、受講者たちやその周辺の人たちが、自分たちでイベントを企画したり、場所を借りてスペースを運営したり興味深い活動がいくつもはじまった。アーツ前橋の活動ではなく、あくまで**自主的な取り組みとして自由に展開されていく**ことで、それぞれのペースで持続しやすい方法を選び取っているようにみえる。

また、そうした活動を後押しするために場所を必要とする人が自由に使えるように「アーツ桑町」というスペースを開設した。公民館の貸会議室ではなく街なかの活動拠点として、「部活動」という形式で登録した団体が打ち合わせや展示、トークなどで利用した。とくに**若い芸術家たちが気軽に作品を発表できる魅力**があった。アーツ前橋の開館の際は、他のスペースと連携し美術館を訪れた人たちが見て回れるためのマップを協働で制作した。

開館後1年半経ち、それぞれのスペースや団体の活動が軌道にのったこともありアーツ桑町は活動を休止する。今後は、地域文化祭「まちフェス」などの連携事業や2014年に開設された豎町スタジオでの制作活動支援に移行していく。

アートスクールBコース モヤモヤをかたちにする



アーティストの藤浩志とともに、前橋中心市街地の散策を行い、個人や地域社会に潜むモヤモヤをもとに企画案を考案したり、街なかの面白い場所、使われていない場所の活用の仕方などを考えた講座。これがきっかけとなり、街なかに市民団体が活動場所として使える「部室」を作る、という構想が生まれた。



前橋をあるく / かたる

開催日: 2011年7月22日(金)、23日(土)、24日(日)

前橋でつくる / かんがえる

開催日: 2011年11月25日(金)、26日(土)、27日(日)

場 所: 旧ミニギャラリー千代田、市内各所

講 師: 藤 浩志

- 2011/7/22~24
アートスクールBコース
モヤモヤをかたちにする
「前橋をあるく／かたる」
- 11/25~27
アートスクールBコース
モヤモヤをかたちにする
「前橋でつくる／かんがえる」
- 2012/11/23
第1回ミーティングテーブル
- 2013/2/24
第2回ミーティングテーブル
- 空き店舗を改装
- 7/1
「アーツ桑町」運営開始
- 2014/1/18
藤浩志 マチ歩きトーク
- 2015/3
「アーツ桑町」運営終了
豎町スタジオでの
制作活動支援に移行

ミーティングテーブル

藤浩志を交え、街なかに「部室」を作る構想をもとに、物件を探すとともに、具体的な利用方法などを話し合った。



第1回 開催日: 2012年11月23日(金・祝)
場 所: 旧ミニギャラリー千代田
講 師: 藤 浩志
ゲスト: 吉川晃司(float 運営メンバー)



第2回 開催日: 2013年2月24日(日)
場 所: 旧ミニギャラリー千代田
講 師: 藤 浩志

アーツ桑町

運営期間:2013年7月~2015年3月

管理運営業務委託:NPO法人 まえはし市民活動PePo

ミーティングテーブルで見つけた空き物件を改装し、「アーツ桑町」が誕生した。街なかをグラウンドにして、そこで活動するための準備や打ち合わせ、気軽に展覧会やイベントなどを開催する場所として活用。公民館のように誰でも使える場所ではなく、街やこの場所に対する意識を高めるため、「部活動」として登録した団体が自由に使える場所として、また登録する際に街の人を「顧問」とすることを条件として運営した。



藤浩志 マチ歩きトーク
開催日:2014年1月18日(土)

Profile

藤 浩志

FUJI Hiroshi

1960年、鹿児島県生まれ。京都市立芸術大学在学中演劇活動に没頭した後、地域社会を舞台とした表現活動を志向し、京都情報社を設立。全国各地のアートプロジェクトの現場で「対話と地域実験」を重ねる。同大学院修了後、パプアニューギニア国立芸術学校勤務。都市計画事務所勤務を経て、92年藤浩志企画制作室を設立。地域資源・適正技術・協力関係を活かした美術表現を試みる。主な作品と

して、取り壊された家の柱からつくられた「101匹のヤセ犬の散歩」。1カ月分の給料のお米からはじまった「お米のカエル物語」。家庭廃材を利用した「Vinyl Plastics Connection」「Kaekko」「Kaeru System」。架空のキーパーソンをつくる「藤島八十郎をつくる」等。十和田市現代美術館館長、十和田奥入瀬芸術祭アーティスティックディレクター、秋田公立美術大学教授。



部活動紹介

アーカイブ

街なかのイベントや、アーツ前橋展覧会の招聘アーティストに関する書籍、動画をアーカイブして発信する活動を行う。

インカレ放送部 — やる気のラジオ —

群馬県内の大学生と教員を中心に、facebookやUSTREAMなどでひと、もの、文化に関する前橋のまちなかの情報を発信する。

うしろまえはし編集部

アーツ前橋のアートスクールの受講生が立ち上げた団体。街なかを紹介するZINEの制作やfacebookでの情報発信などを行う。

群馬大学多文化共生教育・研究プロジェクト

学生から社会人までを対象に、多文化共生社会の構築による地域活性化の担い手を養成する。

5時から飛び出す公務員の会 in 群馬 前橋支部

前橋市役所職員グループ。公務員ライフを充実させるため、様々なイベントや勉強会などを行う。

美術部

アーツ桑町の1階を自主的に改装し、市民ギャラリーとして活用。アーティストを志す個人や学生などの展示のサポートを行う。

NPO法人 まやはし

まちづくりに関する講演会やイベントなどを開催。アーツ桑町は打ち合わせの場所として活用した。

未来の芽部

アーツ前橋の滞在制作事業から生まれた団体。アーティストの作品を共同購入し、アーツ前橋へ寄贈するなど、市民が主体になって芸術文化を支援する活動を行ってきた。

芽部

アートスクールBコースの受講生が立ち上げた団体。詩の朗読や展示、音楽イベント、トークなどを自分たちで企画して実施。街なかの様々な場所を使って「前橋ポエトリーフェスティバル」を開催した。

2 街を舞台にする

Project

駅家の木馬祭り

白川 昌生



- 2011/8/6
夏休みキッズフェスタ2011
「おまつり木馬をつくろう」
- 8/24
中央小学校ワークショップ
- 8/26
桃井小学校ワークショップ
- 9/4
駅家の木馬祭り2011
- 2014/4/12
踊ろう！ワークショップ
寸劇ワークショップ
- 4/13
駅家の木馬祭り2014

前橋という街の名前は「厩橋(うまやばし)」に由来すると言われている。しかし、馬にちなんだ祭りや言い伝えが多いわけではない。アーティストの白川昌生は、こうした疑問から出発してこの地域の歴史を伝えていくための物語を創作した。物語は「赤城の山も今宵限り」という名台詞で知られる任侠、国定忠治と近代文学史にその名を刻む萩原朔太郎という地域ゆかりの2人が、近代化が進む同時代に生きていたことを、架空の登場人物を通して結びつけるものだった。

2011年9月にアーツ前橋のプレイメントとして1回目の駅家の木馬祭りが開催された。「木馬だ、木馬だ、だ、だ、だ」というかけ声とともに商店街を練り歩く「駅家の木馬祭り」の物語では、弁財天のお告げで子どもたちに木馬を作らせ、祭りを行ったと記されており、このかけ声がヨーロッパに渡り、芸術運動「ダダイズム」に影響を与えたと語られている。

この祭りは、実在の人物や生糸産業の興隆、天変地異による被災などの史実と白川の創作とが混じり合いながら、**現在を生きている私たちと地域とのつながりを伝える試み**である。また、伝統的なお祭りとは違い、ちんどん屋「厩橋CHINDON倶楽部」やサンパ隊、ノイズミュージシャンが入り乱れ、形式的ではなく**参加者個々が自由に楽しむ新しい集団的表現の提案**と言えるかもしれない。

また、2回目はアーツ前橋で開催した「白川昌生 ダダ・ダダ・ダ 地域に生きる想像☆の力」展の関連イベントとして開催された。このときは同展参加アーティストの中崎透氏がコーディネーターとなり、紙芝居と寸劇、そして神楽太鼓奏者の石坂亥士氏の「荒馬踊り」などを盛り込んで実施した。

木馬制作ワークショップ

市内の小学校に白川が出向き、子どもたちと木馬に色を塗るワークショップを行った。ワークショップ時には白川が駅家の木馬祭りの紙芝居を上演した。

夏休みキッズフェスタ2011「おまつり木馬をつくろう」

開催日: 2011年8月6日(土)

場 所: 前橋市中央公民館

中央小学校ワークショップ

開催日: 2011年8月24日(水)

場 所: 前橋市立中央小学校

桃井小学校ワークショップ

開催日: 2011年8月26日(金)

場 所: 前橋市立桃井小学校



踊ろう！ワークショップ 寸劇ワークショップ

駅家の木馬祭り本番に向けて、踊りや音楽、かけ声の練習をした。また、駅家の木馬祭りの物語をわかりやすく伝える寸劇の練習を行った。

開催日: 2014年4月12日(土)

場 所: 前橋市中央公民館

講 師: 中崎透(アーティスト)、石坂亥士(神楽太鼓奏者)

1回目

開催日：2011年9月4日(日)

場 所：弁天通り大蓮寺を出発し、
前橋中心市街地を巡回



2回目

開催日：2014年4月13日(日)

場 所：弁天通り大蓮寺を出発し、
前橋中心市街地を巡回

コーディネーター：中崎 透



Profile 中崎 透

NAKAZAKI Tohru

1976年、茨城県生まれ。武蔵野美術大学大学院造形研究科博士後期課程満期単位取得退学。現在、水戸市を拠点に、国内の様々な地で活動。看板をモチーフとした作品をはじめ、パフォーマンス、映像、インスタレーションなど、形式を特定せず制作を展開している。展覧会多数。2006年末より、「Nadegata Instant Party」を結成し、ユニットとしても活動。2007年末より、「遊戯室(中崎透+遠藤水城)」を設立し、運営に携わる。

Profile 石坂 亥士

ISHIZAKA Gaishi

1971年、群馬県桐生市生まれ。神楽太鼓奏者・打楽器奏者として、神社、クラブ、即興演奏、演劇、舞踏といった国内外を問わず様々なシーンに活動の場を広げている。そのスタイルは、神楽太鼓を主軸に、世界各地の民族打楽器を自由に操る稀なスタイルで、ミルフォード・グレイブスや、師匠である土取利行氏の影響を強く受けている。全国様々な場所で演奏活動を行うとともに、保育園、幼稚園、小学校の子どもたちに打楽器の楽しさを伝える、リズムと身体のワークショップも行っている。

Profile

白川 昌生

SHIRAKAWA Yoshio

1948年、福岡県北九州市生まれ。1970年に渡欧、ストラスブール大学文学部哲学科にて哲学を専攻。1974年パリ国立美術学校入学、1981年国立デュッセルドルフ美術大学を卒業、マイスターの称号を受ける。1983年に帰国し、1993年に地域とアートをつなぐ美術活動団体「場所・群馬」を創設。2002年北九州ビエンナーレでの「アートと経済の恋愛学」(北九州市立美術館)、2007年「フィール

ドキャラバン計画」(群馬県立近代美術館)、2014年「白川昌生 ダダ、ダダ、ダ 地域に生きる想像☆の力」(アーツ前橋)など、国内外で活躍する。美術家としての活動の他に評論執筆活動も盛んに行う。主な著書に(以下、いずれも水声社)『日本のダダ 1920-1970』(1988・2005)、『美術、市場、地域通貨をめぐる』(2001)、『美術・記憶・生』(2007)、『美術館・動物園・精神科施設』(2010)など。



01 植栽ワークショップ 「ハーブマンに命を与える」

前橋市内で採集した約30種類の薬草を、それぞれ効能を調べて「ハーブマン」の体の部位に植栽していくワークショップを開催。植栽終了後は「ハーブマン」をどのように維持していくか、サポーターが関われるのはどの部分か、ということ話を合った。

開催日：2013年5月4日（土・祝）



02 植栽&机・イス作り ワークショップ

「ハーブマン」に設置する机やイスを制作するワークショップを開催。材料は、地元の商店街などの協力により、使われなくなったイスや机、本棚などの木製品を提供してもらい、それらを組み合わせて制作した。

開催日：2013年6月8日（土）



03 ハーブマンお披露目イベント 「コンニチハハーブマン！」

市民との数回の植栽ワークショップや机・イス作りワークショップ、定期的な水やりなどを行い完成した「ハーブマン」のお披露目イベントとして開催。植栽されている薬草を使ったハーブシロップを作るワークショップや、音楽コンサート、また「ハーブマン」発案者である「EARTHSCAPE」によるトークイベントなどを開催した。

開催日：2013年7月27日（土）



04 ハーブマン 押し葉ブック作り ワークショップ&音楽イベント

ハーブマンに植栽されている薬草を、オリジナルの押し葉ブックにはさみ、自分だけの押し葉ブックを作るワークショップを開催。また、ハーブマンのデッキ上で、音楽とコンテンポラリーダンスの公演を開催した。

開催日：2013年11月9日（土）、23日（土・祝）



05 植栽ワークショップ

高校生と一緒にハーブの効能を調べ、ハーブマンに植栽した。

開催日：2014年7月6日（日）

市民団体による活用 ノマド市

県内の農家や飲食店による、無農薬の野菜や卵などを販売するイベントを月に1回開催した。



Profile

EARTHSCAPE アースケイプ

ランドスケープデザインスタジオ。国内外の施設のランドスケープやアート作品の制作を行っている。代表の団塚栄喜（1963年、大分県生まれ）が1999年に設立。ららぽーと豊洲、ラゾーナ川崎、銀座三井ビルディング、渋谷区文化総合センター大和田などを手掛ける。Medical Herberman Cafe Project（メディカル・ハーブマン・カフェ・プロ

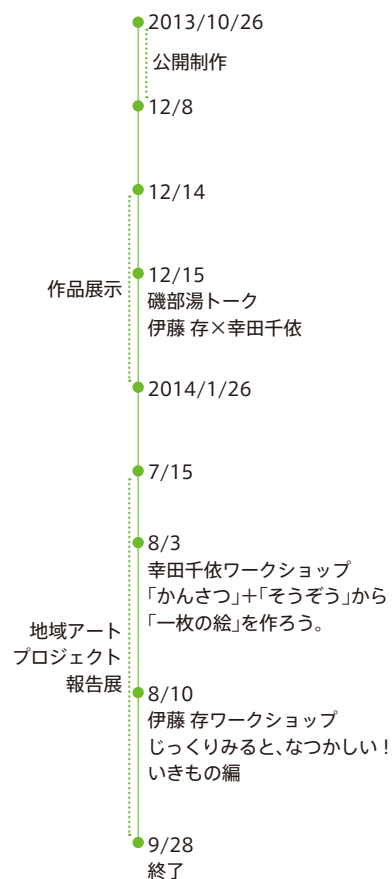
ジェクト）=MHCPを立ち上げ、越後妻有トリエンナーレ2009に参加。移動型の仕組みを活かして、各地でMHCPを地域住民と運営している。2012年にグリーン・グッドデザインアワードを受賞。オリジナルレシピの開発なども行い、鑑賞だけではなく、飲食によって楽しむことができるイベントにしている。

2 街を舞台にする

Project

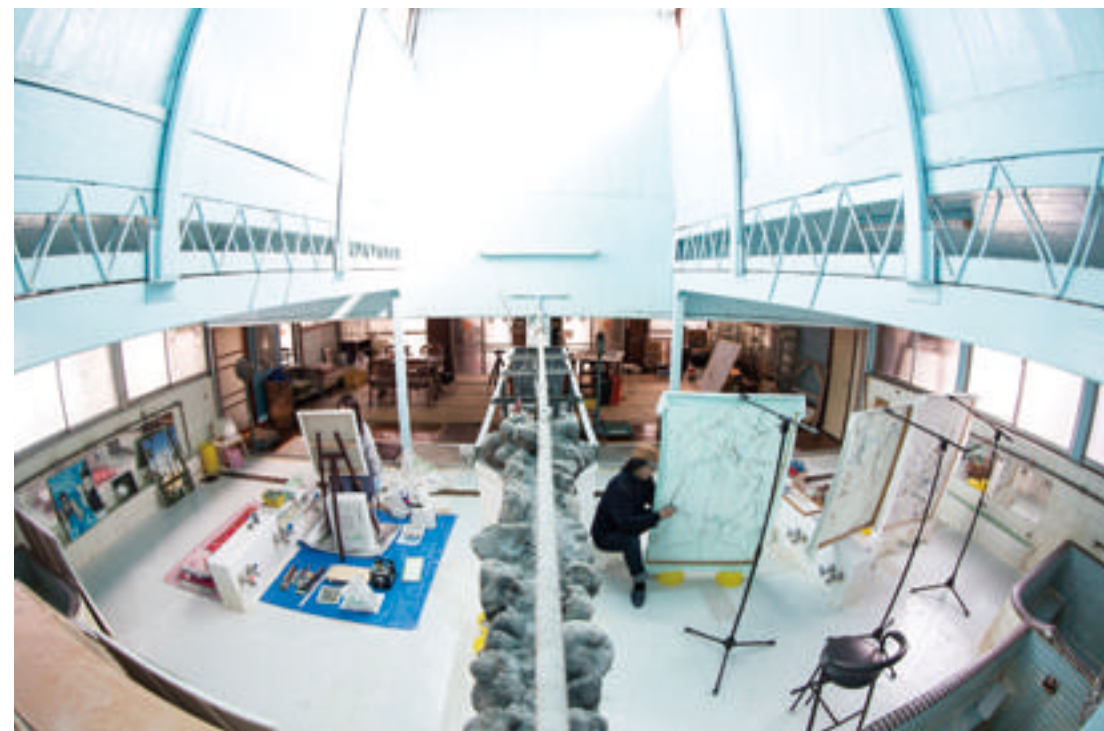
磯部湯活用プロジェクト

伊藤 存・幸田 千依



「磯部湯」は、以前経営されていた銭湯の建物が前橋空襲により崩壊し、煙突だけ残った場所に戦後すぐ建てられ、2012年まで経営された。かつてこの場所を経営していた大家から「何か活用できないか」との話を受け、伊藤存と幸田千依の2名のアーティストがアトリエとして活用し、公開制作と作品展示を行うことになった。

伊藤存は延べ約30日間、幸田千依は約60日間、それぞれ前橋に滞在し、積極的に街なかのリサーチを行った。また、長く滞在し、大家とコミュニケーションを取ることで信頼関係が築かれ、銭湯の壁画を幸田が描いたり、大家が作った刺繍の作品と一緒に展示したりするなどの展開をしていった。そこで描かれた壁画はまだ旧磯部湯に残っている。



会期中の会場運営には、前橋市内の学生が携わり、来場者の対応、アーティストの制作補助、制作の様子を伝える「いそべゆつうしん」の発行、自治会との交流会などを企画した。

運営業務委託: 株式会社オリエント群馬

公開制作

会 期: 2013年10月26日(土)～12月8日(日)

金～日・祝・県民の日(10/28)のみ開場

場 所: 旧磯部湯(前橋市千代田町1丁目4-10)

作品展示

会 期: 2013年12月14日(土)～2014年1月26日(日)

金～日・祝のみ開場／年末年始休み(12月28日～1月4日)

場 所: 旧磯部湯



磯部湯トーク 伊藤 存×幸田千依

開催日: 2013年12月15日(日)

場 所: 旧磯部湯



伊藤 存

伊藤存は、市内を流れる馬場川や利根川、中心市街地などに生息する生き物をリサーチし、それらのドローイングを制作したのち、街のなかに潜む約40種類にも及ぶ生き物たちの世界を刺繍作品により表現した。また、公開制作で訪れた来場者に、前橋で見たことがある生き物の名前と場所を聞き、生き物たちによる前橋の地図を粘土で制作した。



幸田 千依

幸田千依は、前橋に約2カ月間滞在し、市民と交流しながら、前橋で印象に残った風景と、実際に描くときの自身の感情や来場者との会話を織り交ぜた絵画作品を制作した。





幸田千依ワークショップ

「かんさつ」+「そうぞう」から「一枚の絵」を作ろう。

参加者それぞれが、草や花、虫などを「かんさつ」しながら描いた後、その周りの風景を「そうぞう」して描いた。時間が過ぎても描き続ける小学生もいるほど、盛り上がったワークショップだった。

伊藤 存ワークショップ

じっくりみると、なつかしい！いきもの編

同じ種類、大きさをした魚を10匹用意し、2人1組で1匹の魚をじっくり見ながら描いた。上手に描くのではなく、似たような魚でもそれぞれ特徴があることを知ることのできるワークショップだった。

開催日:2014年8月3日(日)

場 所:アーツ前橋 スタジオ、銀座通りもてなし広場

対 象:小学生

開催日:2014年8月10日(日)

場 所:アーツ前橋 スタジオ

対 象:小学生



アーツ前橋での展示

地域アートプロジェクト報告展

〈磯部湯活用プロジェクト〉

伊藤存、幸田千依

地域での活動をより多くの人に紹介するため、「磯部湯」で制作した作品の展覧会を開催した。両アーティストとも、「磯部湯」での活動を終えた後も度々前橋に来るなかで、新たに気づいたことや感じたことをもとに、新作を制作し展示した。

会 期:2014年7月5日(土)~9月28日(日)

時 間:11:00~19:00

休館日:水曜日

観覧料:無料



Profile

伊 藤 存

ITO Zon

1971年、大阪府生まれ。動植物や人をモチーフとする刺繍・映像作品などを制作している。糸の盛り上がり、針の運びによる表現は、でこぼこした味わい深い輪郭線をもち、触覚にも訴えかけながら私た

ちの意識に入り込んでくる。物の輪郭はしばしば行方不明となり、モチーフが不可解に混ざり合って配置され、全体が作られる。謎かけのようなタイトルが付された作品はユーモアにくるまれる。

Profile

幸 田 千 依

KODA Chie

1983年、東京都生まれ長崎育ち。2007年多摩美術大学卒業。様々な場所に住みながらつくる、レジデンスや滞在制作を中心とした活動を行っている。完成した絵画を展示するだけでなく、公開制作を自覚的に行うなど、自身が絵画をつくる過程を見せること、人と作品との出会い方について考え、描くことと見せることの両方について模索。「歩く絵の冒険」など、絵画を室内以外で見せる試みなども展開中。

主な展示に「土湯アラフドアートアニュアル2013」(福島)、「Focusing on everything / 絵のまえで会いましょう」(BankART NYK/神奈川)、「歩く絵のパレードin石巻」(宮城)、「寿から絵を放つ」(寿町/神奈川)、「Power of a Painting 一枚の絵の力」(3331Arts Chiyoda/東京)、「大開眼界」(Soka art center/台北)など。

2 街を舞台にする

Project

あかりプロジェクト - 街にひろがる光 -

高橋 匡太

高橋匡太は、建物や街並みに光を照らすことで、その場所や空間の魅力を引き出すアーティスト。必ずしもイルミネーションのような派手なものではなく、街の風景に寄り添い、その場所の存在を際立たせるようなライトアップである。

このプロジェクトでは、アーツ前橋の外壁のライトアップに加え、馬場川通り商店街、「光の街まえばしプロジェクト実行委員会」の協力を得て、市内各所のライトアップを行った。

馬場川通り商店街には小さな川が流れており、時間とともに変化するカラフルな光でライトアップを行った。その光の流れがアーツ前橋まで続くように、

特徴的なパンチングメタルの外観をライトアップした。馬場川通り商店街には、商店街が設置したイルミネーションがあり、それを残しつつ少し手を加えることでいつもとは違ったイルミネーションを創りあげた。ライトアップの設営・撤収には前橋工科大学の学生が多く関わり、彼らのサポートは大きかった。

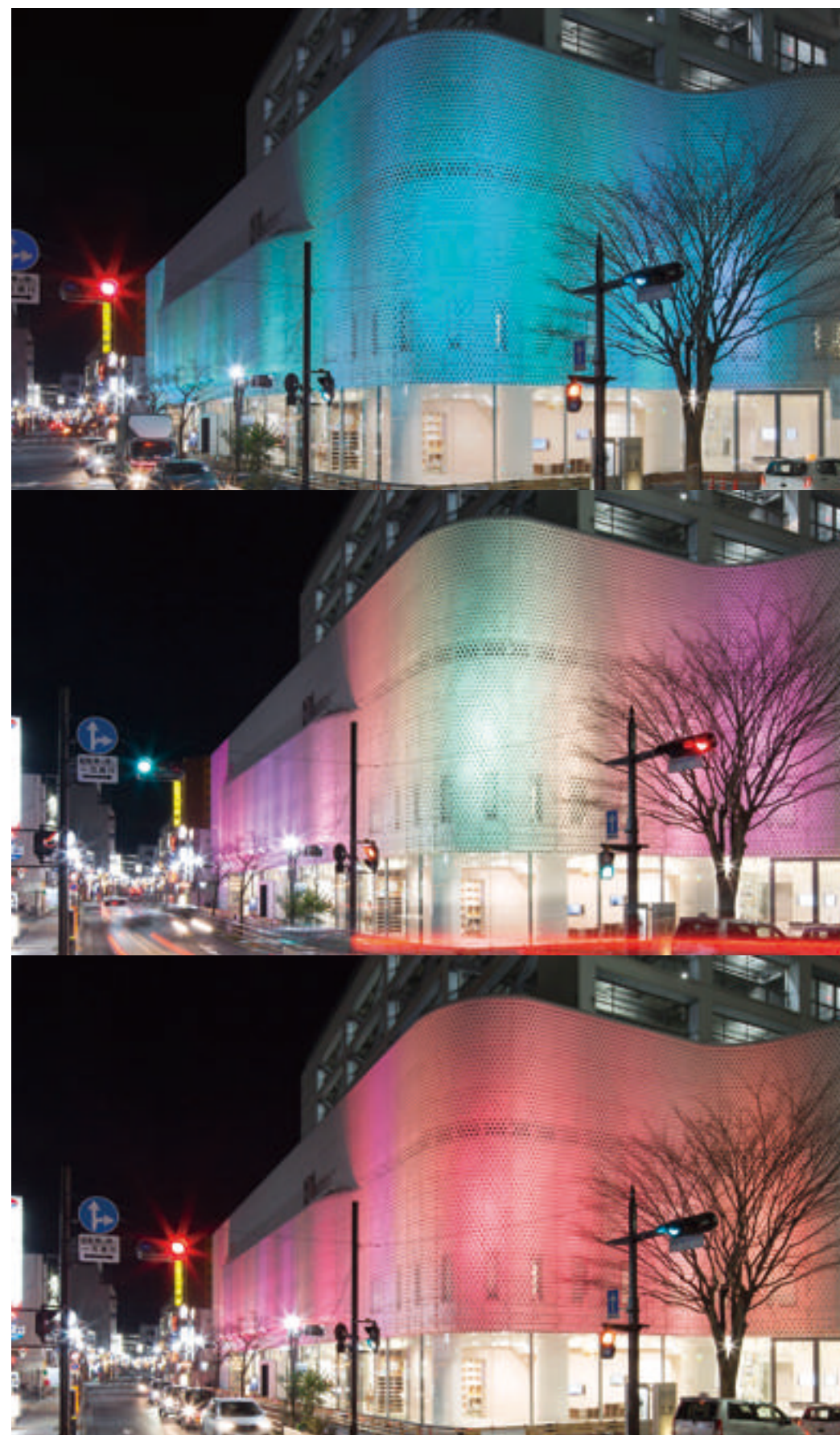
また、高橋が横浜や松山、陸前高田など各地で実施している「ひかりの実」を作るワークショップも、ライトアップ期間中に行い、地域の子どもたちが多数参加した。

会 期：2014年12月1日(月)～2015年2月1日(日)

場 所：アーツ前橋、馬場川通り商店街

協 力：光の街まえばしプロジェクト実行委員会、
馬場川通り振興会、株式会社ハートス、
前橋工科大学 韓研究室・
総合デザイン工学科学生有志、
地域サークル「えん」

- 2014/12/1
ライトアップ開始
- 12/13.14
ワークショップ「ひかりの実」を一緒に作ろう！
「ひかりの実」設置期間
- 12/26
- 2015/2/1
終了





ワークショップ

「ひかりの実」を一緒に作ろう！

市民参加型のイルミネーションプロジェクトである「ひかりの実」を作るワークショップを実施した。「ひかりの実」は果実袋に参加者が自由に笑顔を書き、LEDライトを中に入れ、木に取り付けることで幻想的な風景を生み出すライト。約700個の「ひかりの実」がアーツ前橋周辺と馬場川通りの木々に取り付けられた。

開催日：2014年12月13日(土)、14日(日)

場 所：アーツ前橋 交流スペース



「ひかりの実」設置期間：2014年12月13日(土)～26日(金)



馬場川通り商店街イルミネーション掃除

Profile

高橋 匡太

TAKAHASHI Kyota

1970年、京都府生まれ。京都市立芸術大学大学院美術研究科彫刻専攻修了。映像と光によるアートプロジェクト、パブリックプロジェクション、公演など幅広く国内外で活躍。二条城(京都)、十和田市

現代美術館(青森)など様々な建築物をライトアップした作品を手がけ、ダイナミックで造形的な映像と光の作品を創り出している。

伊藤 存

「アーツ前橋シンポジウム 〜地域とアートを紡ぐ3日間〜」におけるプレゼンテーションから抜粋

公開制作をするのは初めての経験で、前橋の街なかや赤城山などいろんな場所を巡りながら、ここで自分は何ができるかを考えました。例えばいろんな人と一緒に作品を作るということも考えましたが、公開制作という機会を頂き、いつもどおり制作している様子をただ人に見てもらおうということを積極的にやっていこうと思いました。

じゃあどういう作品を作ろうかと考えながら街なかを歩いていた時に、小さな用水路が流れていて、地域の人に話を聞くと、信じられないくらい多くの種類の魚がそこで生きているということを知りました。そこに生き物がいる、それに注意を向けて見てみると、一見何もないような用水路に地域の人が植えた植木や流れを変化させるために置かれた石に気づき、何か開放感のようなものを感じました。少し視点を変えるだけで同じ場所が違った風景に見えてくるのが面白く、以前から生き物をテーマに作っていた《みえない

土地の建築物》という刺繍作品をより具体的に前橋で作ろうと思いました。私にとっては、その土地のどこにどのような生き物が住んでいるかという情報は、その土地を知るための重要なポイントだったので、まずは地域の人に案内をしてもらい、昆虫や魚の採集から始めました。

普段はアトリエの中で制作している私にとって、制作しているところを公開するとどのような反応があるのだろう、ということに関心がありました。作品ができていくにつれて、訳がわからないう意見をもらいながらも、人の素直な意見を直接聞け、普段一人で制作している私にはそれが心地よく、新鮮な経験ができました。

高橋 匡太

あかりプロジェクトを終えて

先日大変嬉しいことがありましたのでご報告します。

前橋でのお話ではないのですが、新潟の十日町(大地の芸術祭の里)で先日行われた、広大な雪原に2万個のLEDを植えて一夜限りの「ひかりの花畑」を出現させるという僕のプロジェクトに、前橋の学生さんたちがスタッフとして参加してくれたのです。プロジェクトを通して人の繋がりができて、また次に繋がるのがとても嬉しかった。

彼らは前橋での「あかりプロジェクト -街にひろがる光-」で寒い中、搬入、ワークショップ、撤去と、サポーターとして頑張ってくれました。彼らをはじめ多くのサポーターさんたちは照明や施行のプロではありません。効率や合理性を考えたらスキルを持ったプロ集団で、短時間で作り上げるのが業界的な常識です。しかし、僕にはプロジェクトと銘打っている以上、いくつか大切にしたいことがありました。

1つは制作のプロセスを共有することです。プロセスを共有することで、完成したときの喜びはアーティストだけでなく皆で共有できるので何倍にもなります。それになにより、「表現をして人に伝える行為によって個人は社会に参加する」ことの喜びを彼らに知ってほしかった。

しかし！前橋には個人で社会に参加する術を持った方々が数多くいらっしゃいました。

光の街まえばしプロジェクト実行委員会の方々、馬場川通り振興会の北原さん・・・彼らはいわゆる芸術家と呼ばれる人ではないけれども社会と関わる術を持った立派な表現者でした。

北原さんと、過去10年以上に渡って馬場川で手がけられた様々なイルミネーションのアルバムをめくりながらお話を聞いていると、「これはなかなかできることじゃないな」と感服しました。ただ、そのお話の際に「いやぁ最近ちょっと疲れちゃってね。気になっているんだけど」と。気になっているのは何かというと、何年にも渡って使用されてきたイルミネーションの電球がところどころ、切れていたりして随分と傷んできていることでした。

「まず掃除からはじめませんか」これが僕の第一の提案でした。学生さんをはじめとするサポーターと一緒に既存のイルミネーションを外して、使えるものと使えないものを選別する、それがこのプロジェクトの始まりでした。

プロジェクトを終えたある学生の言葉が僕を勇気づけてくれました。『お客さんに「ありがとう」って声をかけてもらえてスタッフでいたことがほんとに誇らしかったし、そんな経験はいままでなかったからとても嬉しかった』と。

見えないものを照らし出すのが光の最大の魅力であると信じています。これからも前橋の街の隠れた魅力や人の繋がりを照らし出す、そんな「あかりプロジェクト」でありたいと思います。

3 食とアート

Concept

食をテーマにした〈ダイニングプロジェクト〉では、2013年3月に、合理化や効率化された現代社会の中で見過ごされてきた手間暇をかけることを見つめ直し、赤城山から吹き下ろす「からっ風」や「日照時間が長い」といった前橋の気候の特徴を踏まえながら、地元野菜を使って乾燥保存の魅力を伝える展示やイベントを実施した。同年10月の開館以降は、アーティストと市民が協働しながら多種多様なプロジェクトを進行している。

前橋市は、赤城山頂から市街地までの標高差があり、中心市街地から30分ほど車を走らせると農地や森林の広がる豊かな自然環境、そしてその風土の中で生まれた郷土料理や歴史文化がある。また、県庁所在地ではあるが、第3次産業だけでなく第1次産業—露地野菜や畜産など就農者が多いという特徴もある。

招聘アーティストは、それぞれの興味関心に応じて郊外の農業、地元の特産品、市民の日々の生活、前橋の自然環境や歴史文化などをリサーチし素材とする中で、「食」を様々な場面で交錯、介在させる。例えば、市民が日々食べている家庭料理や前橋の特産をリサーチしたり、前橋の歴史文化について調べてインスピレーションを受けたものを食べ物としてプレゼンテーションして味わうことができるようにしたり、日本の農業についての議論や意見交換を行い、人々が交流するテーブルに食べ物を準備するといったことだ。誰もが無関係ではられない「食」で、ゆるやかに人と人、人とことを繋ぎ合わせながら、普段見過ごしてきていたものを再発見したり、新たな価値を生みだしたりしている。そのことによって人と自然との関係から発生する大きな文化の体系のなかで、アートがもたらすものを考えるきっかけを作っている。



ダイニングプロジェクト
〈風の食堂〉乾物プロジェクト展示(2013年3月)

3 食とアート

Project

風の食堂

フェルナンド・ガルシア・ドリー



スペイン人アーティストのフェルナンド・ガルシア・ドリーは、市内農家や酪農家らとTPPをはじめとした日本の農業が現在直面している問題を話し合い、参加者と共有していくイベントを街なかのスペースで複数回実施した。それに先立ち、そのスペースに設置する机や椅子や屋台を制作し、イベント時には参加者へ手作りのチーズや焼き饅頭を提供し、現代の農業と社会の関係を話し合うための場作りを行った。彼がつくりあげる対話の場は、農業をもっと幅広い社会

の文脈に引き入れながら、誰もがまだ答えを見いだせないことについて話をするものである。私たちのこれからの暮らしについて、イギリスやスペインの事例などを交えながら真摯に対話を積み重ねていく姿から、アーティストとして多様で自由な見方や価値観を共有しながら、その場にいる人々と対等な関係で協働していく、また、一般市民と農業関係者の間に入る媒介としての存在や役割が徐々に現れてきた。

プロジェクトの拠点

トークイベントを行うために鳥の形をしたテーブルや椅子、屋台などを制作して設置し、TPP(環太平洋戦略的経済連携協定)の関連資料などを展示した。

会 期:2013年10月26日(土)~11月10日(日)
金~日・祝・県民の日(10月28日)のみ開場
場 所:旧国際交流広場まちなかサロン
(前橋市千代田町2丁目8-14)

- 2013.10/26
プロジェクト開始
- 10/31
キッチンレクチャー
アダム・サザーランド
- 11/1
キッチンレクチャー
長谷川農園
- 作品展示 11/2
対談
松島農園
- 11/4
キッチンレクチャー
増田拓史
- 11/8
対談
木村一彦
- 11/10
対談
ジル・スタッサル
終了



トークイベント〈キッチンレクチャー〉

様々なゲストと対談形式のイベントを開催。



01 アダム・サザーランド (グライズデール・アーツ/イギリス)

アーティストが農作業をしたり、地域に出て市民と協働したりするなどの取り組みを行っているグライズデール・アーツの事例紹介を踏まえ、アーティストと社会や地域コミュニティの関わりについて議論した。

開催日: 2013年10月31日(木)



02 長谷川農園(市内農家)

長谷川農園のほか、チーズ工房スリーブラウンや若手農家の前原農園の参加もあった。農業を始めた理由や現在の取り組みを話す中で、農業の現状や後継者不足、生産物の販路の問題が浮かび上がった。またTPPの影響については、賛否含め様々な意見が出された。

開催日: 2013年11月1日(金)



03 松島農園(市内農家)

有機農業を行っている松島農園の取り組みを紹介し、農家と消費者のこれからの関係について議論した。

開催日: 2013年11月2日(土)



04 増田拓史(アーティスト)

お互いのこれまでの活動や前橋でのプロジェクトについて紹介し、意見交換を行った。

開催日: 2013年11月4日(月・祝)



05 木村一彦(群馬県農民運動連合会会長)

TPPが日本の農業や国民の食生活に与える影響について課題を共有し、意見交換した。

開催日: 2013年11月8日(金)



06 ジル・スタッサール(アーティスト)

食をテーマに活動しているフランス人アーティスト、ジル・スタッサールとお互いの活動について対談を行った。

開催日: 2013年11月10日(日)



Profile

フェルナンド・ガルシア・ドリー

Fernando Garcia DORY

1978年、マドリッド生まれ。造形美術や農村社会学を学び、これまでマドリッド、ベルリン、スペイン北部の山間を歩き来しながらアーティストや農エコロジストとしての活動を行ってきた。作品は、文化と自然の関係性を問うものが多く、ランドスケープ、農村、さらには人間の欲望や期待についての問いかけをしてきた。また、これらのテーマは、アイデンティティ、自然や社会の危機、あるいはユートピアといったものにも関連し、近年のプロ

ジェクトではネオ・パストラル(新しい牧畜、羊飼いのライフスタイル)を提案している。ソフィア王妃芸術センター美術館(マドリッド)、ドクメンタ13(カッセル)などでプロジェクトを発表するほか、非政府組織WAMIP(The World Alliance of Mobile, Indigenous Peoples)の理事や、工芸の小学校をマヨルカ島やスペイン北部に開設する活動などを行う。

3 食とアート

Project

前橋食堂

増田 拓史



前橋在住の市民の家庭料理をリサーチし、最終的に写真やレシピ、エピソードを掲載したブックレット『前橋食堂 暮らしの中に見えたもの』を刊行。そのほか、参加者が家庭料理を持ち寄り、エピソードを紹介し合った後に味わうワークショップを実施し、タブロイド誌の発行やフェイスブックでプロジェクトの進行状況を発信した。家庭料理の調査を通して、**大きな歴史としては記述されない個人の歴史や人生**、日常生活の中の豊かさや儚さ、地域性や街の現在をすくい上げ、取材地の人々に地元について再考するきっかけとなることを目的としていた。その結果、何気ない日常や家族について思い返した、**あまり意識していなかった前橋らしさを再発見**したといった地元からの

反応のほか、プロジェクト終了後もブックレットを手にとった前橋以外の地域からも反響があった。**ブックレットを手にとった人々と前橋に生きる人々の人生のあいだで共感**が生まれているようである。

また、増田の食堂プロジェクトは前橋で3カ所目であり、その後も秋田県大館市、青森県十和田市、宮城県塩釜市浦戸諸島など各地で実施している。何気ない家庭料理にスポットを当てるといふ基本スタイルはあるが、ある一品にまつわるたくさんの人々の記憶の調査、映像インスタレーションや体験型のツアーで取材結果の発表、取材の様子を公開収録で行うなど、**食堂プロジェクト自体も少しずつ発展**している。

- プロジェクト紹介展示
- 10/26
ダブロイド紙Vol.1発行
 - 11/13
番外編 出張ワークショップ
 - 12/8
ワークショップ
「お食事交換会」
 - 2014/1/25
ブックレット刊行記念イベント
ダブロイド紙Vol.2発行
 - 1/26
展示終了



ブックレット制作

調査期間: 2013年10月19日(土)～11月20日(水)

12月10日(火)、11日(水)

発行日: 2014年1月25日(土)

家庭訪問件数: 22 件

収集レシピ数: 76 件

Facebookページ「前橋食堂」:

<https://www.facebook.com/maebashishokudo>



プロジェクト紹介展示

収集したレシピ、リサーチ風景が分かる写真などを展示した。

会期: 2013年10月26日(土)～2014年1月26日(日)

水曜、年末年始休み(12月28日～1月4日)

場所: アーツ前橋 アーカイヴ





ワークショップ「お食事交流会」

参加者それぞれの家庭から持ち寄られた家庭料理を通して「前橋らしい食とは」、「家庭料理とは」について考え、意見交換を行った。従来から親しまれていた粉もののほか、モツ煮が新たな存在として浮かび上がった。

開催日:2013年12月8日(日)

場 所:旧国際交流広場まちなかサロン



ブックレット刊行記念イベント

前橋の家庭料理をリサーチして発行したブックレットを記念して、プロジェクトを通して感じたことや明らかになったことを話した。取材協力家庭から家庭料理の提供もあり、味とともにプロジェクトを体感した。参加者からは今後もプロジェクトを続けてほしいとの声が上がった。

開催日:2014年1月25日(土)

場 所:旧国際交流広場まちなかサロン



番外編 群馬大学教育学部へ出張ワークショップ

群馬大学教育学部美術教育講座の招待で、大学生に日常的に食べているものを持ち寄ってもらい、なぜそれを日常的に食べているのか理由を話し合った。健康に気を使った手作り料理がある一方で、手軽な既製品も多く持ち寄られ、忙しい学生生活の中でも美味しいものが食べたいという大学生の気持ちがうかがえた。

開催日:2013年11月13日(水)

場 所:群馬大学教育学部

(前橋市荒牧町4丁目2)



Profile

増田 拓史

MASUDA Hirofumi

1982年生まれ。横浜美術短期大学卒業。現在は宮城県石巻市に拠点を置き活動している。特定のコミュニティや地域をリサーチし、作品を制作している。その手法として近年では、日常の家庭料理にフォーカスをあて、個々人の出自や地域性を再発見し後世に伝える食堂プロジェクトを地域の方々と協働しながら展開している。主な活動に、2014～2015年「トワダ・キッチンチャンネル／十和田・奥入瀬プロジェクト／十和田市現代美術館」(青森)、

2014年「大館食堂／大館・北秋田芸術祭2014」(秋田)、2013～2014年「前橋食堂／アーツ前橋地域アートプロジェクト」(群馬)、2012年「Guimarães nocnoc 2012／ポルトガル」、2011年「代官山食堂／代官山インスタレーション 2011」(東京)、2011年「黄金食堂／黄金町バザール 2011」(横浜)、2010～2011年「Treasure Hill Artist Village Public Art Project」(寶蔵巖国際芸術村/ 台北・台湾)など。

3 食とアート

Project

風の食堂 in 粕川

南風食堂・風景と食設計室ホー

前橋市粕川地区を舞台にした〈風の食堂 in 粕川〉は、**豊かな自然や気候の中で育まれてきた歴史や文化、食、生活、記憶**などをアーティストがリサーチし、その魅力を発掘・発信していくプロジェクト。「南風食堂」と「風景と食設計室ホー」の2組のアーティストを招聘した。粕川の食をテーマとしたプロジェクトを…と依頼したが、実際に粕川の様々な場所を訪れ人と話す中で、こちらの想定を超え、記憶、生活、歴史、神事、伝統行事などを両アーティストとも深く探ることから始めた。「地域の食」と考えた時に、その地域で採れる特産物や名物的な食べものをイメージすることが多いが、**人の「生」のあらゆる部分に食が関係している**ということを改めて認識することができた。なお、リサーチの際は、**地元の方がコーディネーターとなり、場所や人とアーティストをつなげる役割を担った。**

● 南風食堂

- 2015/3/31
オープニングイベント
アーティストによる
作品解説ツアー
- 5/23
南風食堂
アーティストトーク
- 5/31
展示終了

「甘い記憶／
食べる／
続けて残った
もの」展

● 風景と食設計室ホー

- 2015/3/7.8
プレイベント
- 秋
体験型ツアー
イベント開催予定



粕川地区

2004年に前橋市に合併。前橋市の東部、赤城山南麓のほぼ中央に位置し、雄大な赤城山を背景にその山頂の火口湖「小沼」を源流とする一級河川「粕川」が地域の中央を流れる、自然環境に恵まれた地域。近世には市が開かれる宿場町としても栄え、今でも多くの伝統芸能が受け継がれている。

南風食堂

南風食堂はレシピ本の発行やイベントのケータリング、食をテーマにした展覧会などに出品するなど料理家、アーティストと両方の分野を行き来しながら活動している。前橋では、ある70代の方の食に関する思い出話がきっかけとなり、**長い時間を経てもなお、残り続けている記憶**について興味をもった。そこで、粕川に住む84歳から95歳の5名の方に取材をし、**「甘い記憶、食についての思い出、昔から今まで続いている習慣」**を尋

ねた。長く生きていると、自身を取り巻く環境や社会の状況、個人の欲望はもちろん変化していくが、それでもその人の中に残り続けたもの、長い「生」につながる食や暮らしには強さがあり、それを写真と言葉で記録して展覧会を開催した。展示された写真や言葉は一見普遍的な風景ではあるが、その人ならではの個性豊かな物語であり、同時に全ての人がそれぞれ独自の物語を生きているということに気づききっかけになった。



「甘い記憶／食べる／続けて残ったもの」展

企画:三原寛子(南風食堂)、豊嶋秀樹(gm projects) / 取材・テキスト:三原寛子
写真撮影: 細川葉子 / 展示構成:豊嶋秀樹

会 期:2015年3月31日(火)~5月31日(日)
毎週木・金及び、3月31日(火)、4月12日(日)、5月23日(土)、24日(日)、30日(土)、31日(日)は開館
場 所:粕川支所1階、2階(前橋市粕川町西田面216番地1)
協 力:前橋市粕川支所、粕川公民館、粕川地区地域づくり協議会

アーティストによる作品解説ツアー
開催日:2015年3月31日(火)



Profile 豊嶋 秀樹
TOYOSHIMA Hideki

1971年大阪生まれ。grafの設立メンバーの一人で、2009年9月以降はgm projectsのメンバーとして多岐に活動。奈良美智、三沢厚彦、押忍！手芸部などアーティストとのコラボレーションも多い。国内外での展覧会のキュレーションや空間構成、イベントを数多く手がける。

Profile

南風食堂
NANPU-SHOKUDO

小岩里佳と三原寛子による料理ユニット。食に関する展覧会、企画提案、編集物の制作、雑誌やWEBでの料理紹介、商品開発などを行う。

著作に「whole cooking」(MARBLE BOOKS)、「乾物の本」(SPACE SHOWER BOOKS)など。

取材協力者

金子勝重、須田和子、竹澤佳代、
筑井友一、長谷川富次



風景と食設計室ホー



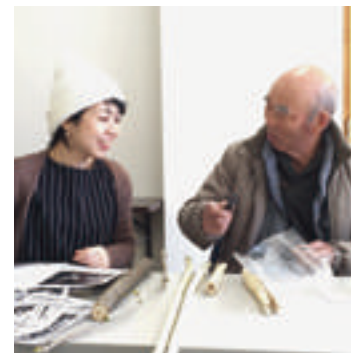
風景と食設計室ホーは、「遠くの風景と、ひとさじのスープ。世界と、わたしの手のひらは、繋がっている。」をコンセプトに、**食を介し、それにまつわる風景や物語を連想させる**プロジェクトを行っている。手法としては食の提供、展示、パフォーマンスなど多様である。

粕川の名前の由来は、川に酒粕を流す神事から名付けられており、600年以上前から続くと言われ、今でも毎年行われている。その神事や神様へのお供え物などをリサーチし、**2015年秋に粕川の食と文化を体験するツアー型のイベント**を開催する。

2014年度はそのプレイベントとして、プロジェクトの紹介とツアーで提供予定のメニューを、粕川から見

た赤城山の形のプレートに盛りつけて提供した。当日のテーブルには、粕川での風習について解説が記された巻物と地元の方から提供していただいた繭玉(繭型の団子)やケズリバナなどのお供え物を展示。また、白い盃に甘酒をアーティストが注いで参加者一人ひとりに供し、儀式のような厳かな雰囲気の中でイベントは始まった。材料には粕川で生産されている米粉や酒粕などを使用した。

地域の風景や土地性から、食べものを介し、その地域ならではの生活文化や風習を捉えることができ、それを体内に取り込むことでより深く知ることができるようなイベントだった。



喫茶粕川 - 神さまがたべるもの -

開催日: 2015年3月7日(土)、8日(日)

場 所: ROBSON COFFEE アーツ前橋店





不動大滝は粕川上流にある、赤城山最大落差の滝である。人々はこの大滝を神と崇めて、不動明王を祀るためのお堂を建てた。2015年秋には、この不動大滝を舞台に、食と文化を体験するツアーを開催する予定。

赤城山南麓に位置する粕川。

鍵型の形をし、川が貫流する処。

赤城山中腹に住む親神様が里の子神にむけて

濁酒をその川に流したのがこの土地の名の由来という。

わたしたちは、粕川の人々から赤城山に抱かれたこの地に伝わる風習、

暮らしのこと、食べもののことを伝え聞いた。

かつて、この地には、たくさんさんの神様がいたようだ。

参加者は赤城山の中へ入り、粕川に沿って、山を歩く。

粕川を上流へと登り、濁酒を流す。

わたしたちは、神々の気配を感じながら、かつての風景を、そっと供える。

風景と食設計室ホー



Profile

風景と食設計室ホー

高岡友美と永森志希乃によるユニット。ランドスケープデザイン事務所を経て、2012年3月より活動。「遠くの風景と、ひとさじのスープ。世界と、わたしの手のひらは、繋がっている。」をコンセプトに、そこに

ある風景・文化・社会を、食を介して切り取る。フードプレゼンテーション、アートプロジェクト、デザインなど幅広く手がける。2015年より東京と富山の2拠点で、さらに広がりのある活動を目指す。

増田 拓史

「アーツ前橋シンポジウム 〜地域とアートを紡ぐ3日間〜」におけるプレゼンテーションから抜粋

プロジェクト中、テーマにしていたことが4つありました。1つ目に地域の文化歴史を掘り起こしていくということ、2つ目に家庭料理を通して個人のストーリーを見つけ出していくということ、そして、3つ目に今回からテーマの1つに加わったのですが、台所に立つ人の姿です。それは何げない物事といたしますか、家庭をもたれていれば毎朝毎晩台所に立っている人の姿を見ていると思うのですが、いつか見られなくなってしまう可能性もあるのではないのでしょうか。プロジェクトを進めていく中で、日常過ぎてその儚さや繊細さに気づいてなかったのだということを自覚した瞬間がありました。4つ目は、一番このプロジェクトを行う中で大事にしている醍醐味だと感じている地域の方々との関わり合いです。前橋でも、拠点にしている石巻でもそうなのですが、リサーチをしても何をしていても、街の人にとって僕は誰でもいいのです。「なんとなく仲良

くなった増田くんが、こんなことやっているから協力するよ」って思われている。アートで何かをしようというわけでは全然なく、個人的に関わりをもっていくことが実は面白いなって思っています。その結果、アーティストという職を活かして、その地域の人たちと協働していけるのではないのでしょうか。

今回のプロジェクトの過程で、アーティスト側の立場ではなく協力して頂いた家庭方々の立場から、お母さんや亡くなったお父さんのことを回想するきっかけになっていたとお聞きし、そういう反応もあるのだと知ることができました。そして、このプロジェクトに期待されていることは、そこに生活していた人の証を残していくことなのかもしれないと思いました。

風景と食設計室ホー 永森 志希乃

柿の実、最後の3つは、鳥と、神様に

目に見えないけど、そこにあるもの。
そういうものが存在すると思う。

冬のはじめ、粕川という土地を訪れた。
赤城山南麓に位置する粕川は、鍵型の形をしていて、赤城山の小沼を水源とした川が貫流する。その名前は、山の中腹に住む親神が祭事を終えると、里の子神様に向けて川に濁酒を流したのが由来だと言う。滞在中は、史跡や資料館、酒造、赤城型民家、赤城山不動大滝…と様々な所に連れて行って頂いた。そして、ここに暮らすおじいちゃんおばあちゃんに、この地の風習、暮らしのこと、食べものの事などを伝え聞いた。

粕川の森さんのお家にお邪魔した時の事だった。
美味しい干し柿を頂きながら、何気なく話してくれた。「柿の木の最後の3つの実^は神様にあげるって言うんだ。 本当は鳥にあげようという事なんだけど、それだと採っちゃう人もいるから、神さまにあげろって言うんだ。」
笑いながら話してくれた。こじつけたみたいな話に、こちららも笑ってしまった。たわいもない世間話だけれど、何故かずっと心に残った。

人も鳥も神様も、一緒に柿を頂くのだ。

赤城山に抱かれ、かつて養蚕や農業を営んできたこの土地の人々。

食^をべること(生きること)と祈りは繋がっていた。
山に、川に、蚕に、家に、田に、畑に、ふとした所に神様がいて、食べものを供えた。人と自然、それに宿る八百万の神様とが共同体として暮らしていた。
それでいて、この土地の人たちは、崇め奉るというよりは、どこかおおらかで、少しお茶目なくらいの想像力を持って神様を見ているように思った。時に畏怖の念をもって、時に家族のように身近な存在として、共に笑い、泣き、励まし合いながら過ごす。

目に見えない存在も含めて、共に生きる。
そうできたら、世界は平和だと思う。

わたしたちは、風景をゆっくりと咀嚼^{そしやく}する。
資料や書物だけでは分からない事がある。
出会ったおじいちゃん、おばあちゃんの声が、淘汰されていく文化の中で見えなくなってしまった、ささやかで特別な日常を教えてくれる。時とともに変化することも受け止めながらも、その声に耳を澄ます。

小さな柿が教えてくれたこと。
わたしたちは、それをそっと差し出して、今は、どこかに隠れてしまっているかもしれない神様の気配を感じてみる。

そういうと、おじいちゃんたちは、
「そんなたいしたことではない」と笑いそうだけれど。

4 衣服と記憶

Concept

江戸時代より繭や生糸の集散地であり、大正、昭和と生糸産業で栄えた前橋。現在、製糸工場はほとんど姿を消してしまっただが、街を歩くと、かつて「**生糸のまち**」といわれた面影にふと出会うことがある。市街地には、生糸や繭の保存庫として利用された赤レンガ倉庫が点在し、器械製糸場跡や生糸改所跡の史碑が建つ。また赤城山麓では養蚕家屋や桑畑が残り、年配の女性からは育てた繭で着物を織ったという話を聞くこともできる。

〈きぬプロジェクト〉では、このような生糸にまつわる地域の歴史を探りながら、**日常生活と切りはなせない「衣」と向き合い**、服を着ることや作ることについてあらためて考えることを目的とした。1組のアーティストが2カ年にわたりワークショップやリサーチを行い、最終的に展覧会で作品を発表するという形式をとった。参加者は、**ファッションへの興味から、アートとは意識せずに参加する**ことができ、自分が関わったワークショップから作品が生まれ、それを鑑賞することで、より強い経験を得た。

4 衣服と記憶

Project

〈ファッションの時間〉

西尾美也 + FORM ON WORDS



「服はデザイナーだけが作るのではない」。

アーツ前橋では、このコンセプトのもと、スタッフユニフォームを制作した。依頼したのは装いとコミュニケーションの関係性に着目し、市民との協働によるプロジェクトを国内外で展開している現代美術家・西尾美也。西尾のコンセプトをもとに、彼が代表をつとめるファッションブランドFORM ON WORDSがワークショップを行い、服としてのかたちを与えていった。

2013年10月、西尾の過去のプロジェクトや作品をパネル展示で紹介する〈ファッションの遊び方〉を開催。長期滞在できない西尾に代わり、プロジェクトに賛同する群馬大学教育学部の学生たちによって運営された。同時に、ユニフォームの素材集めや活動の

拠点として〈ファッションの図書館〉という仕組みをつくり、ユニフォームのデザインなどのアイデア集めとして〈ファッションの時間〉というワークショップを展開した。市民から集められた古着のほか、地域に伝わる農村歌舞伎衣裳にも着目し、**その土地や人の記憶を読み解きながら、デザインを決めていった**。最終的にはユニフォームお披露目とともに制作過程をドキュメント展示し、プロジェクトを開かれるものにした。ワークショップ参加者や古着の提供者、そして着用者である受付・監視スタッフの服の記憶や想いが反映されたユニフォームは、完成した時点で愛着がもたれるものになり、アートプロジェクトや展覧会終了後も、スタッフに着用され続け、**新しい関係性を生み出すコミュニケーションツールとなる**。

作品展示〈ファッションの遊び方〉

西尾美也のこれまでの活動を写真や映像で紹介し、誰にとっても身近な服を着ることについての「当たり前」に疑問を投げかけた。

会 期：2013年10月26日(土)～2014年1月26日(日)

金～日・祝のみ開場

年末年始休み(12月28日～1月4日)

場 所：豎町スタジオ

運営協力：群馬大学

ファッショントーク

西尾美也のこれまでの活動をスライドで紹介。前橋で始めようとしているプロジェクト〈ファッションの時間〉について説明し、市民から古着を集め、最終的にはユニフォームとして甦ることを話した。

開催日：2013年11月23日(土・祝)

場 所：豎町スタジオ

〈ファッションの図書館〉

市民から愛着のある服飾品を、それにまつわるエピソードとともに募集した。集まった服は、図書館で本を借りるように、誰もが無料で借りられる仕組みをつくった。参加者や利用者は、いつもと違った方法で着る、選ぶといった服との関わりを体験した。会期中90着の服飾品が集まった。

会 期：2013年11月29日(金)～2014年1月26日(日)

金～日・祝のみ開場

年末年始休み(12月28日～1月4日)

場 所：豎町スタジオ



2013年10月～2015年1月

- 2013/10/26
- 11/29
〈ファッションの図書館〉開始
- 10/27
〈ファッションの時間〉1時間目「物語」
- 11/23
〈ファッションの時間〉2時間目「試着」
ファッショントーク
- 11/24
〈ファッションの時間〉3時間目「模様」
- 2014/1/18
〈ファッションの時間〉4時間目「舞台衣装」
- 1/19
〈ファッションの時間〉5時間目「小道具」
- 1/26
作品展示終了
〈ファッションの図書館〉終了
- 6/4
〈ファッションの時間〉6時間目「パターン」
- 6/21
〈ファッションの時間〉7時間目「ことばのかたち」
- 10/10
新作およびスタッフユニフォーム披露
- 11/8・9
ファッションショー「ノーテーション」
- 2015/1/13
展覧会終了



ワークショップ〈ファッションの時間〉

服について語り合ったり、少し変わった方法で裁縫したり……

当たり前と思っている服について考えをめぐらせる、FORM ON WORDSの「家庭科の授業」。

ここでのアイデアがユニフォームのデザインに反映されていった。



01 1時間目「物語」

参加者が思い入れのある服を持ち寄り、そのエピソードを紹介。さらに「からっ風」や「車社会」といった、前橋を表すキーワードを出し合った。

開催日：2013年10月27日（日）
場 所：豎町スタジオ



02 2時間目「試着」

服をデザインや色などの好みで選ぶのではなく、服にまつわるエピソードから選んだり、他の参加者と服を交換するなどした。いつもと異なる方法で選んだ服を着て、中心商店街を散策し、参加者は戸惑いながらもその違和感や楽しさを体験した。

開催日：2013年11月23日（土・祝）
場 所：豎町スタジオ



03 3時間目「模様」

模様まつわる5つのワークショップを行った。身の回りの模様を見直し、様々な手法で模様を制作。車にひかれた古着のエピソードから着想を得て、自転車のフロタージュを制作した。

開催日：2013年11月24日（日）
場 所：豎町スタジオ



04 4時間目「舞台衣装」

前半は「見る・着る」と題して、普段目にする機会がない歌舞伎衣装やケニアの子どもがデザインした服などを広げて、着方を考えた。後半は「前橋らしさを身につけるとしたら」というお題のもと、イメージした衣装を制作し、中心商店街を行進した。

開催日：2014年1月18日（土）
場 所：豎町スタジオ



05 5時間目「小道具」

服のエピソードにある単語をキーワードとして、それをイメージした小道具を制作。別のグループが出来上がった小道具を使って、演劇仕立てにして発表。制作者の意図とズレていく言葉と形の面白さを体験した。

開催日：2014年1月19日（日）
場 所：豎町スタジオ



06 6時間目「パターン」

アーツ前橋の受付・監視員に、勤務中の服装や環境についてヒアリング。集められた古着の中から、ユニフォームにするならどんな形が良いか選び、意見交換を行った。

開催日：2014年6月4日（水）
場 所：アーツ前橋スタジオ



07 7時間目「ことばのかたち」

古着について説明した“ことば”を聞き、服の“かたち”や色を想像して絵にした。また、エピソードの中から抜き出された単語を見て、意味が分からない言葉に戸惑いつつも、浮かんだイメージを描いた。子どもたちの自由な発想で生まれた絵が、ユニフォームの模様に取り入れられた。

開催日：2014年6月21日（土）
場 所：横室会館（前橋市富士見町横室561-1）

アーツ前橋ユニフォーム

受付・監視員のスタッフユニフォームは、地域の人たちの記憶と約1年にわたって開催したワークショップから出たアイデアをもとに生み出された。211点の古着を紺色に染め直してパッチワークした3種類のワンピースと、その上に着用するチュールが完成した。



パターン

集まった古着の中から、ユニフォームとしてふさわしい形を3つ選び、パターンのもとにした。



デザインの要素
Design 02

デザインの要素
Design 01



市民から寄せられた古着のエピソードからは「車にひかれて弱っていくさま」「丸がいっぱいいつている」などをキーワードとして、服のデザインに取り込んでいった。

Episode

「遅刻ギリギリ、走って大学へ行くと、かばんの中にあるはずのお気に入りのパーカーがなくなっていた。お昼に探しにいくと、交差点で無惨な姿で発見された。信号を前になす術のない私は、車にひかれて弱っていくさまを見守ることしかできなかった。(MBS-029)」
「丸がいっぱいいつているところがお気に入り。(MBS-039)」

子どもが描いた大きすぎる服のボタンの絵をアップリケとしてデザインに取り込んでいる。



デザインの要素
Design 03

地域に受け継がれてきた横室歌舞伎衣裳の文様。



ファッションショー ノーテーション

前橋に住む5人の市民にインタビューを行い、彼らのための服をつくるという新作コレクションを発表。ショーでは一般公募によって集まった出演者が服を身に着け、音声ガイドの指示に従いながら、服のモデルとなった人物の人生をランウェイ上で演じた。

開催日: 2014年11月8日(土)、9日(日)

場 所: アーツ前橋 ギャラリー2

演出・構成: 野上絹代 (FAIFAI)

音 楽: 佐藤公俊+難波卓己 (from Open Reel Ensemble)

映 像: 中島唱太+Yu Nakajima

写 真: 湯浅亨



Profile

西尾 美也

NISHIO Yoshinari

1982年、奈良県生まれ、同在住。2011年東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。専門は先端芸術表現。文化庁新進芸術家海外研修制度2年派遣研修員(ケニア共和国ナイロビ)等を経て、2015年奈良県立大学地域創造学部専任教員に就任。装いの行為とコミュニケーションの関係性に着目し、市民や学生との協働によるプロジェクトを

国内外で展開している。代表的なプロジェクトに、世界のさまざまな都市で見ず知らずの通行人と衣服を交換する《セルフセレクト》や、数十年前の家族写真を同じ場所、装い、メンバーで再現制作する《家族の制服》、世界各地の巨大な喪失物を古着のパッチワークで再建する《オーバーオール》など。

FORM ON WORDS

フォームオンワーズ

西尾美也のアートプロジェクト「ことばのかたち工房」(練馬区立東大泉児童館、2008-11年)の活動を経て、2011年に西尾、竹内大悟(1977年生まれ)、臼井隆志(1987年生まれ)、濱祐斗(1987年生まれ)を中心に発足。衣料の生産・流通・消費サイクルの過程に、アートプロジェクトの手法を組

み入れることで新しい装いの文化を生み出していくファッションブランド。個人や地域コミュニティを対象に服とのさまざまな接し方(作り方、着方、遊び方など)を提案している。主なグループ展に「拡張するファッション」(水戸芸術館、茨城/2014年)など。

アート前橋のアートプロジェクトを評価する

今日アートの役割とは何か？ この時代美術館は何をするべきなのか？ アーツ前橋の一連の地域アートプロジェクトは、この問いに答えるための手がかりを与えてくれるように感じられる。

アーツ前橋が開館してから、前橋に行く機会が増えた。けれども、このことは単に目的地としてアーツ前橋という空間が生まれたということの意味しているのではない。むしろアーツ前橋を経由して、前橋のいろいろな場に行き、街にいる作家や市民と話す機会が増えたというのが正確だろう。前橋映像祭というイベントを前橋在住の白川昌生と企画していたこともあり、アーツ前橋の開館以前から前橋にはしばしば来ていた。アーツ前橋が誕生して何が変化したのかといえば、前橋という街の「玄関」とでも呼ぶべきものが生まれたという感覚である。もちろんアーツ前橋の中で開催されている展覧会も意欲的で興味深いのだが、あえていえばそれはアーツ前橋がもたらしたものの一部にすぎない。アーツ前橋は単に入るべき建物ではなく、より外へと出て行くための通過地点なのだ。

このこと自体、21世紀に入ってはっきりと可視化されるようになったアートの役割の変容や美術館の社会的位置付けの変化と大きく関係している。

かつて、美術とは主として絵画や彫刻のような自律した芸術作品であり、近代的な美術館は、

そうした芸術作品を蒐集、収蔵、展示する空間として機能してきた。もちろん、現代美術の発展はそうした伝統的な美術観を批判的に捉えるという側面があり、行為や出来事、ハプニングやパフォーマンス、コンセプチュアルアートやランドアートなどさまざまな形式によって、美術が時に美術館の枠組みを大きく逸脱させてきたことはよく知られる通りである。けれども、20世紀を通じて美術館はこのような動向も含めてやはり蒐集、収蔵、展示する中心的な空間であり続けた。

けれども、既に多くの人々が指摘しているように、近年の社会や経済、政治やテクノロジーの決定的な変化により、今ではアーティストの表現形式は大きく変化している。アーティストとは、自律した芸術作品だけではなく、さまざまなメディアや空間を駆使し、いろいろな職能を持った人々と協働しながら、コミュニケーションやコミュニティ、ネットワークや制度を作り出す人を指すようになっている。

その結果、アーティストがその作品を見せる場所も美術館から美術館の外へと拡張した。美術館は、社会の中に偏在しているアートの実践の場の中心ではなく、あくまでもさまざまな実践の一つへと相対的な位置づけを変えたのである。

これは、経済的な観点からいえば、物質的な製造業から非物質的なサービスやメディア文化、金融、知識産業への移行に対応し、政治的には、国家や行政の役割の相対的な低下と権力の分散化、市

民社会の成熟などに対応している。技術的には、インターネットや携帯端末に代表されるメディア技術の発展がもたらしたユビキタス化と移動性の上昇に支えられている。この大きな変化の中で、アートやアーティスト、そして美術館の社会的な役割が変化しているのだ。

アートプロジェクトという形式が重要になっているのは、この文脈である。アーツ前橋で開館前から繰り返されてきたさまざまなプロジェクトもまたこうした変化を反映している。

白川昌生の「駅家の木馬祭り」は、こうした変化を示す一例だろう。「木馬祭り」は白川がフィクションと史実を混ぜ込んで作り出した一種の偽史「駅家の木馬物語」をもとに実際にお祭りを「捏造」しようという地域型アートプロジェクトである。

そこで作品として提示されるのは、白川が創作した歴史（偽史）やお祭りであり、それを支える人々の有機的なネットワークである。市民、とりわけ子どもとの共同作業によって製作される木馬は、立体作品として見るができないこともないが、いずれにしてもそれが作られた文脈や背景、そしてプロセスを抜きにして自律した作品として見ることに意味があるわけではない。

したがって、木馬祭りのようなイベント作品が終了した後に美術館で展示されているものは、あくまでも作品の記録・ドキュメンテーションであって、作品そのものではない。作品の全体は、街の中

の経験であり、そこで生まれたコミュニケーションの相対である。アーティストである白川は、一般的に理解されているような自律した芸術作品を作り出しているのではなく、こうした一連のイベントのオルガナイザー的な役割を果たしている。

けれども、ここでその変化をアートの生産様式、物質的作品から非物質的作品への移行にのみ還元すると、アートとアーティスト、そして美術館の役割の根源的な変質を見逃すことになる。白川昌生の場合、彼が生み出しているのは単なるプロジェクトではなく、世界に対する一つの見方である。「駅家の木馬祭り」の興味深い点は、それが単に史実とフィクションを織り交ぜた偽史であるからだけではなく、それ自体が「美術とは何か？」という問いに対する一つのオルタナティブな回答でもあるからだ。

「駅家の木馬物語」の壮大なフィクションに、20世紀初頭の西洋美術最大の運動の一つである「ダダイズム」の語源が、前橋の木馬祭りにあるというのがある。木馬祭りのかけごえで使われた「木馬だ、木馬だ、だ、だ、だ」がスイス人技術者を経てチューリッヒに伝えられたというのである（ちなみに、ダダはフランス語で木馬という意味があり、ダダイズムの語源の一つと考えられている）。繰り返しになるが、これは白川の妄想であってももちろんそんな史実は存在しない。むしろここで重要なことは、もしこの妄想が事実だったとし

たら、私たちが知っている西洋美術史、さらにはそれをさまざまな形で輸入してきた日本の美術史をどのようなものだったのだろうかと思像力をめぐらすことだ。

それは、別の言葉で言うと世界を〈批判的〉に捉えることにほかならない。ここで言う〈批判的〉という態度は、今私たちが住んでいる世界を当然視せずに、世界を構成しているさまざまな要因を捉え直し、ありえたかもしれないもう一つの世界を想像することである。こうした作業は、20世紀までは主として哲学者や文学者の仕事だった。21世紀になって、映像や音やデジタルデータなどメディアが多様化するにつれて、書籍と活字を中心とする個人的な思索活動は、より協同的で視覚的、かつ身体的な活動へと変容した。今ではアーティストと呼ばれている人たちが、そうした知的実践活動の中心的な部分を担い始めている。

21世紀のアートプロジェクトの評価軸として重要なのは、この「批判性」である。プロジェクトの政治はどれだけそれが批判性を用いているのかー現在の世界とその限界を描き出し、それを乗り越えるオルタナティブな世界を描きだすことができるのかーにかかっている。かつてアートの価値が「美しいかどうか」で測られたのに対し、あるいは近代美術が「新しいかどうか」「センセーショナルかどうか」で評価されたのに対し、アートプロジェクトはそれが「十分に批判的かどう

か」で評価されるべきだろう。

しかし、ここでいう「批判性」はかつての哲学・思想的な営為と決定的に異なる。それは、アートプロジェクトで行なわれている批判が閉じられた空間における個人的な営為ではなく、開かれた空間におけるさまざまな共同作業によって生み出されているという点においてである。したがって、批判的であるということは現実の社会から距離を保ち安全な場所から勝手な発言をすることではない。このことは、アートがもはや特権的な自律空間の中に留まることができず、さまざまな政治、社会、経済との関係の中に位置づける必要が生まれた現代的な状況に対応している。

したがって、アートプロジェクトには、もう一つの評価軸である「民主的であるかどうか」という評価軸を導入する必要がある。民主的(デモクラシー)という語は、ギリシャ以来長い歴史を持ち、市民を政治的決定の主体として位置づける政治的な用語だが、政治の意思決定過程が複雑化し、社会が複雑化するのに対応して、再び脚光を浴びている。アートプロジェクトもまた例外ではない。

「民主的であるかどうか」ということは、必ずしも多くの人を集めるとか多数決によって物事を決めるということを意味するのではない。選挙制度に還元できるものでもない。集客は市場原理に従った商業的なプロジェクトの方が見込めるし、多数決という手法はどうしても結論が出ない時に最終的な次善策である。そうではなく、既

存の政治や経済の枠組みからともすればこぼれてしまうような事柄をよりオープンな形で、多様な人々が議論できる枠組みを構想することが今アートプロジェクトには求められているのだ。それは、しばしば一部の特権的な人々に占有されてきたように見えたアートを、本当の意味で市民の手元へと解放していく試みになっているかどうかということでもある。

アーツ前橋は、そのコンセプトからして単なる美術館であることを越えた芸術文化施設として構想された。そこで展開されているアートプロジェクトすべての評価を、まだ開館して1年半しかたっていないこの時期に行うことは、率直に言って難しい。けれども、開館前から展開していた藤浩志のプロジェクト「アートスクール:モヤモヤをかたちにする」や先述の白川昌生の「木馬祭り」がゆっくりではあるが、前橋の街に別の想像力を与え、街の中にアートと議論の場を偏在させていることは、訪れるたびにはっきりと感ずることができる。「ダイニングプロジェクト」や西尾美也の「きぬプロジェクト」は、既存の狭義のアートの枠組みを越えた市民共同型の新しい民主的なアートプロジェクトの好例として評価されるだろう。この数年の間にまかれた種は、どのように育って21世紀の新しいアートのかたちを生み出すのだろうか。実験は始まったばかりだが、成果が今から楽しみだ。



前橋映像祭

白川昌生と毛利嘉孝が2011年に始めた、短編、長編、ドキュメンタリー、フィクションなどさまざまなジャンルの映像作品を上映する映像祭。音や映像、インスタレーション、パフォーマンスなど隣接領域の作品発表、シンポジウムなども行う。

Profile

毛利 嘉孝 社会学者／東京藝術大学准教授
MOURI Yoshitaka

1963年生まれ。専門は文化研究、メディア研究。メディアや都市大衆文化、現代美術、社会運動などの広く批評活動を行っている。京都大学卒業。ロンドン大学でMAとPh.D.取得。九州大学助手、助教授を経た後現職。著書に『ストリートの思想』(NHK出版)、『はじめてのDiY』(ブルース・インターアクションズ)、『ポピュラー音楽と資本主義』(せりか書房)、『文化＝政治』(月曜社)など。NPO法人アートインスティテュート北九州理事。

美術館が行う地域アートプロジェクト

このドキュメントにまとめられた2011年から2015年の4年間は、アーツ前橋開館を挟む非常に重要な期間であった。この期間に実施してきた地域アートプロジェクトは立ち上げ段階にあたり、地域に埋もれているものや人などに触れ・探し出すため、様々な実験的な試みを展開した。

美術館が地域アートプロジェクトを行うこと

アーツ前橋は、美術館としての役割はもちろんであるが、館のコンセプトの構築段階から地域でのアートプロジェクトを活動の主軸の1つとして捉え、アーティストの創造力と日常の生活や課題が出会うことで、新しい出来事を作り出すことを目的に、街なかを舞台に活動してきた。その活動はまだ建物を持たないときから始まり、2013年の開館後も複数の地域アートプロジェクトを実施してきた。近年、全国各地で地域でのアートプロジェクトが盛んに実施されているが、それを美術館の主要な活動の1つと捉え、年間通して継続的に実施していることは、アーツ前橋の大きな特徴の1つと考えている。美術館の役割は、作品の収集、保存、展示を中心とし、地域の文化を守り後世に残していく、質の高い芸術作品を鑑賞する機会を作ることである。アーツ前橋はそれらの役割に加え、地域アートプロジェクトを行うことで、従来の美術館の役割や機能だけではなかなか成し得ない、一般の人がアーティストと交流し制作過程に参加して一緒に作品を作る、などの状況を創り出し、美術に対して受動的な関わりだけでなく、より多様で能動的に関わる機会を提供できる点が特徴である。それは館の3つのコンセプト「創造的であること」

「みんなで共有すること」「対話的であること」に現れており、そのコンセプトをもとに地域アートプロジェクトを展開してきた。

地域アートプロジェクトにおけるアーティストの創造的な活動は、たんに作品を作る以上のものを生み出すことができる。滞在制作事業で制作した照屋勇賢(p6-9)の作品は、作品の共同購入から、美術館へ寄贈という活動につながった。また、EARTHSCAPEによる「ハーブマン」(p34-37)の設置は、街の隙間活用の提案型プロジェクトであり、県内農家や飲食店によるマルシェが開催された。藤浩志のアートスクールからはさまざまな表現活動が生まれ、そのための活動拠点の誕生など、アーティスト個人の制作にとどまらず、地域の人による新たな活動が生まれた。

アートプロジェクトは、地域リサーチで感じたことを色々な方法でみんなと共有し、気づきや考えるきっかけを与えることができる。〈風の食堂 in 粕川〉(p60-67)では、南風食堂、風景と食設計室ホーの2組のアーティストが前橋の東端の粕川地区でインタビューやリサーチを行い、展示や食事会を通して発表した。住んでいると当たり前と感じていること、住んでいても知らなかったことが作品となって表現されることで、自分たちの土地に対する新たな発見の機会を提供した。それにより今度は、参加した地元の人たちも作る側にまわり、アーティストと一緒にプロジェクトを作り上げていく予定だ。

今生きているアーティストが地域で活動するため、そこに住む人との対話が生まれるのは必然で

あり、それが地域アートプロジェクトの大きな魅力の1つだろう。〈磯部湯活用プロジェクト〉(p38-43)では、伊藤存と幸田千依が公開制作を行い、地域の人と対話することが作品と地域の双方に影響を及ぼした。片山真理の滞在制作(p14-17)では、街を歩いて知り合った商店街の店主たちと片山が対話を重ね、信頼関係を結び、それぞれのお店でセルフポートレート作品を制作した。

アーツ前橋地域アートプロジェクトのこれから

2014年に本格的に開始した滞在制作事業により一層力を入れていく予定だ。美術館によるアーティスト支援の仕組みは、若手作家の展覧会開催やアワードの設置などがあるが、作品制作のための空間と時間をアーティストに提供することこそが一番の支援につながるのではないかと考えるからだ。ただ、そうは言っても、当ドキュメントの滞在制作事業(p4-21)を見ると分かるように、アーティストは滞在すると街や人を見て、その土地固有のものを見出そうとする。そこから作品の発想を得ること、街の人たちとインタビューやワークショップを行うことは、アーティストにとっても街や人にとっても大きな刺激となるだろうし、受け入れる側の想像を軽やかに飛び越え、地域に対する新しい発見や驚きを提供してくれるに違いない。アーティストを信じ、考えや発想に柔軟に対応して、彼らが創造力を十分に発揮できるような滞在制作事業を、地域の人々とともに作り上げていきたいと思っている。

一方で地域のなかにアーティストが入っていくと、それまであまり表立っていなかった課題が見

えてくる。高橋匡太の〈あかりプロジェクト〉(p44-47)では、プランを作る下見の段階で商店街の高齢化により発生した課題が見えてきた。その課題に対し、アーティスト、美術館、商店街、地元の学生たちで、課題解決に取り組むことも目的の1つになった。アートは地域の課題に対し直接的に解決ができるわけではないし、そもそも課題を解決するための手段ではない。しかし、地域の課題に対してアーティストや美術館だけで向き合うのではなく、様々な団体と協働し、それぞれの強みを活かしながら向き合っていくことも今後の取り組みとして重要な点になると考えている。

毛利氏の指摘にもあるように、経済や政治、あるいは技術の分野における非物質化/分散化/ユビキタス化と呼べるような大きな変化と、美術館やアーティストの社会的な役割の変化は呼応している側面がある。美術館は作品の価値を裏付けるのではなく、価値を生み出していく場所になっている。また、展覧会という時間や場所が限定された枠を取り払う可能性を模索している。アーティストは、政治や経済などの芸術とは異なる言説の領域と向き合うことで新しい批評言語を必要とする挑発的な作品を生み出す。そこで見出されるアートの未来像は誰にとっても未知のものであり、それゆえに誰かが優位な立場にいるわけではない。そうした民主的でお互いが対等に学び合うようなプロセスにこそ、地域のアートプロジェクトの魅力があると考えていいはずだ。



本書は、2011年から2015年3月までに実施された地域アートプロジェクトのドキュメントとして刊行されました。

アーツ前橋 地域アートプロジェクト 2011-2015 ドキュメント

2015年3月31日 発行

企画・監修	アーツ前橋
編集・執筆	住友文彦＋辻瑞生＋小田久美子＋家入健生（アーツ前橋）
執筆	片山真理＋高橋匡太＋永森志希乃＋毛利嘉孝
編集協力	朝日印刷工業株式会社
デザイン	平野武（朝日印刷工業株式会社）
写真	木暮伸也 （p2-3、p5、p7下、p8、p11、p12左、p14、p16、 p18-21、p30、p31右上・右中・中、p32-33、p35、 p38、p39上・下、p40上・◎・右下、p41-43、p45-46、 p47上・左下、p51右上・右下、p52-53、p54上、p55_04、 p57右下、p62、p64上、p65、p72、p73左下、p75_07、 p76上・Design01・Design02、p77、p88=◎）
	細川葉子 （p61、p63）
	横山博之 （p4、p24-25、p70-71、p85）
仕様	B5判 92ページ アジロ綴じ
使用書体	AXIS、UDリュウミン、スーラ
印刷・製本	朝日印刷工業株式会社
助成	財団法人 地域創造、 平成26年度 文化庁 地域発・文化芸術創造発信イニシアチブ
発行	アーツ前橋



©アーツ前橋 2015
許可のない転載、複製を禁止します。



〒 371-0022 群馬県前橋市千代田町 5-1-16
TEL: 027-230-1144 FAX: 027-232-2016
E-mail: artsmaebashi@city.maebashi.gunma.jp
<http://artsmaebashi.jp>